

シルビオ・ゲゼル著『貨幣の国営化 —貨幣改革のための続編第二部—』（1892年）（下）

相田 慎一 訳*

第十五章 利子

われわれは、ここで、かつて数世紀も前に、他人の助けなしに、まったくの独力で、10000ターラーを宝くじで獲得するという注目すべき才能を発揮した先祖をもっているひとりの男を見ることにしよう。彼の先祖は、文字通り自力で財産を築いたのであった。

彼は、この貨幣を銀行に持っていき、この貨幣が生む利子によって生活するとともに、自らの家族を立派に教育した上に、自分の資産をも拡大した。

その息子は、この銀行預金を相続した。そして彼は、絶えず良き愛国者であり続けながら、自分の生活を父と同じやり方で続けた。つまり、彼は、彼の父と同様に利子を受け取り、自分の家族を立派に教育しつつ、自らが受け取った利子の一部を毎年銀行に預けて、自分の所有を拡大したのであった。

その孫もまた同じようなやり方で生活した。かくしてわれわれは、ここに、4, 8, 10世代にわたってまったく生産的活動を何もしないで、毎年豊かな収入を得ているひとつの家族を見ることになる。どうしてそのようなことが可能に

なったのか。なぜなら、先祖がかつて巨額の宝くじに当選したからである。

以上の事実は、国民経済学が次のような尤もらしい説明を与えざるをえないほどの、きわめて重大な事実なのである。

〔上述の家族の〕先祖が巨額の宝くじに当選した時期に、鋤を持たないで、手で耕作を行っているひとりの農民がいたとしよう。当然のことながら、彼は鋤を持っていなかったの、彼の収穫は少なかった。

銀行家はこの事態を観察した上で、この農民の前で次のような損得計算を行った。「今日、お前は10シェフェルの小麦しか収穫できていない。もしお前が鋤を備え、利用したならば、お前は、これまでよりも少ない労力によって二倍の収穫を得ることができるようになるだろう。したがって、私はお前に貨幣を貸すから、お前はその貨幣で鋤を買い、その代償として、私に毎年2シェフェルの小麦を提供しなさい」と。

このような損得計算を論拠としながら、国民経済学者は次のように推論する。「農民が鋤を持たないならば、彼はそれほど多くの小麦を耕作することができないだろう。したがって、銀行家は、鋤の提供によって農民の労働を生産的にするのだから、農民が支払う利子は、貨幣を借りたことへのささやかな反対給付にすぎない」と。

* 専修大学経済学部教授

今や、資本を借りた場合、何ゆえ利子が支払われるのかについてのこうした国民経済学者の説明が正しいのかどうか、それについての吟味をわれわれはこれから行うことにしよう。

ところで、この場合、農民が土地を耕作するのに必要としたのは、貨幣ではなく、鋤であった。貨幣は即自的にも向自的にも農民にとっていささかの価値をもつものではなかった。彼は、貨幣を目的実現のための手段としてだけ、つまり鋤を手に入れるための資金としてだけ、必要としたにすぎなかった。したがって、本来の資本は貨幣ではなく、商品—鋤—である。それに対し、貨幣は、資本—その性格は、貨幣が廃絶されてもいささかの变化も被ることがない—の交換手段にすぎない。

その点を明らかにするために、われわれは貨幣を無視し、貨幣が存在しなかった時代、つまり、物々交換がなお通常の状態であった時代を想定しよう。

当時、節約した者だけが資本を蓄積した。だが、彼には、自分の蓄えを貨幣形態で永続的に保持しようとする機会とは与えられず、むしろ商品、たとえば織布、機械そして鋤などとして、つまり貨幣のような擬制的資本 *fictives Capital* としてではなく、実物資本 *wirkliches Capital* として蓄積される以外にはなかった。だが、こうした実物資本は、自然の破壊的作用の影響を被った。したがって、資本家がこのような「自然の破壊作用がもたらす」損害を防ぐことは、いつもきわめて困難なことであった。そのために彼は、こうした実物資本を再生産の中で再び資本として利用する以外には、つまり、鋤を他人に貸す以外には、このような損害を防ぐことができなかったのである。

かくして資本供給は、つねにきわめて多量かつ均質的になり、しかも資本需要よりもはるかに大きかった。したがって、この場合にも、—供給と需要が価格を決定するがゆえに—より少ない「資本」需要はより大きな「資本」供給に比してはるかに有利な状態にあった。このこと

に、疑問の余地はない。このような状況にあったとすれば、資本家は、農民から鋤に対する利子を要求できたであろうか。否である。つまり、鋤の供給はその需要よりも大きいがゆえに、またこの鋤は毎年価値を減少させていくがゆえに、この鋤の所有者は、このような損失を他の人々に転嫁させる必要があった。かくして、彼は、農民が後日この資本の返却を以前に借りた現物それ自体で行うという条件での貸与しか行うことができなかったのである。

その結果、農民は、1, 2, 10年後に、貸与された現物の同量を返却するという義務を負ったにすぎなかった。つまり、だれも、利子などを要求しなかった。なぜなら、農民は、資本家の資本を錆、火災そして保管費などから守ったからである。

かくして、商品所有者からは、自らの資本を貨幣に転態させる可能性はもとより、商品が日々錆などによって被る損失を他者に転嫁させる可能性が奪われているならば、またすべての資本家が錆、損失などからいかに自分の資本を守るのかという心配を日々抱くようになっているならば、資本供給はただちに大幅に増加するだろうし、利子制度も即座に廃絶されることだろう。

[以上のことから明らかとなるように]、貨幣は資本ではなく、実物資本 *greifbares Capital* の交換手段にすぎないのである。他方、実物資本は、小麦、道具などの—すべての商人が知っているように—急速に腐敗する対象物から構成されている。とすれば、このような損失を支払うのはだれなのか。いずれにしても、だれかがこのような損失を支払わなければならない。そしてそのだれかは、自分の資本を他の人々に無利子で貸し付けることで、この損失を回避できるのだろうか。

資本は即自的にも向自的にもいかなる利子も要求しないということ、また資本は錆などによる損失を阻止できる場合には、それで満足してしまうということ、これらのことが分かるだろ

う。だが、なにゆえ [今や] いわゆる資本の代表者、すなわち貨幣は利子を要求するのだろうか。

[今日の貨幣が利子を要求するのは]、今日の貨幣が自らのうちに**詐欺行為**を孕んでいるからである。今日、取引される商品は、私がすでに繰り返し言及したように、**予め貨幣所有者の担保になるか、または貨幣所有者に販売＝譲渡される**。したがって、貨幣所有者の意志なしには、今日商品は[生産者から消費者に]移動しない。かくして貨幣所有者は、商品に対して貴族のように振る舞うことになる。その結果、商品は彼らの所有になってしまう。だが、**彼らの所有の扱い方については、いかなる義務も彼らに課されることがないのである**。

それに対し、保管費などは生産者の負担になる。つまり、商品を支配する貨幣は、このような負担から解放される。かくして貨幣は、保管費などの出費を実際の商品所有者から他者に転嫁させるのである。

今や農民のところに届けられる鋤は、貨幣という遮断機を通過しなければならない。換言すれば、貨幣所有者は、[今や鋤が農民のところにまで届けられる]道路を閉ざすことができる。たとえば、銀行家が貨幣を撤収するならば、農民は永遠に鋤なしで耕作しなければならない。そのことと同時に、この鋤は鍛冶屋のもとで、また鍛冶屋の費用で錆びていくことになる。今や、毎日われわれの目前で生じているのとまったく同じ事態が生じるのである。つまり、商品という資本が倉庫の中で腐敗していく間に、労働者は、資本の供給不足のために、失業状態に陥ってしまう。何ゆえなのか。なぜなら、銀行家が商品の通る道路を閉鎖してしまうからである。換言すれば、銀行家が不信のために流通から貨幣を撤収してしまうからである。

それゆえ、今日農民が鋤を手に入れられるかどうかは、銀行家に依存しているといってよい。つまり、今日鋤を提供する者は、究極的には銀行家なのである。だが、鋤は銀行家の費用で錆

びるのではなく、**他人の費用で錆びる**。したがって、銀行家個人は、鋤が錆びるのを避け、鍛冶屋の損失を防ぐことなどにはいかなる利害も持つことがない。かくして、農民が銀行家から鋤を手に入れたいと望むならば、彼は銀行家にその反対給付、すなわち特別報酬としての利子を支払わなければならないのである。

したがって、国民経済学が利子を資本の生産性と関連づけて説明するならば、国民経済学は間違っている。なぜなら、資本の生産性は利子とはまったく関係がないからである。つまり、利子は、今日の貨幣制度の単なる随伴現象にすぎず、次の諸点にその基礎を持つものでしかない。

- 1) 貨幣の導入以来、需要は貨幣所有者の手に独占的に握られている。
- 2) その結果、貨幣所有者は、商品ならびに自らの所有に対する自由な処分権を持っている。
- 3) だが、その際、保管費、錆や窃盗などの損失費用を負担するのは、貨幣所有者ではなく、生産者である。
- 4) 貨幣所有者は、こうした事態を利用して、取引において利潤を獲得する。
- 5) かくして貨幣所有者は、商品所有者ないし生産者に比して大きな特権を享受する。
- 6) 銀行家は、その他の人々に貨幣を貸与することを通じてこうした貨幣所有者に貨幣特権を授ける。
- 7) そして最終的に利子は、当の特権の数字上での価値表明を意味する。

[以上のことから明らかにするように]、適切な貨幣改革によってこのような貨幣特権が廃絶されるならば、つまり、貨幣が商品よりもより良い存在にもより悪い存在にもならなければ、利子制度は廃絶されるにちがいないし、この利子制度に依拠している全機構もまた解体されるにちがいない。

こうした利子の、工業状態に及ぼす災いにみちた作用を全体的に理解できる人が、いったい

どこにいるというのだろうか。

たとえば、国家債務の利子のためにだけ、フランスの生産者は毎年8.7億フランを支払わなければならない。またアルゼンチンのような小さな共和国では、毎年、自らの国家債務のためにだけ8千万マルクの利子が租税を通じて徴収されなければならない。

ロシア、イタリア、ポルトガル、スペインは、利子制度のために疲弊し衰退している。またすべての南アメリカ諸国は、利子制度のために破産しつつある。他方、ドイツで人々が誠実に行動したならば、つまり、ドイツ政府が、きわめて零細な商人に要求されるような行動をしたならば、彼らはずっと以前に彼らの債権者を破産させていたにちがいない。なぜなら、金本位制度の導入以来、赤字額が膨大に膨らんでいたからである。

それはどうしてなのか。この場合、民間人ならば、軽率な破産といった理由で告訴されるだろう。そして検事が自分の職務に忠実であるならば、彼らは、ずっと前に金融大臣を被告席に座らせていたにちがいない。しかるに、この増大する債務を清算するための資金をどこから得たらよいのだろうか。たとえば、1871年に行ったような新たな略奪行為によってなのか。[そのような手段をとるならば]、資本は、きわめて急速にレントナーの手に集中するだろうが、それに比例して、国民の担税力も日々減退していくだろう。そればかりでなしに、複利のために債務の支払いに必要な租税額も、ますます大きくなっていくだろう。

このような迷宮からの脱出口はない。それゆえ、ヨーロッパの国家財政の状態を冷静に観察する者たちは、カタストロフィーが必然的運命であり、軍縮も税制改革も、事態の自然的経過を阻止することができないという確信を抱くに至っている。かくして人々がこうした災いの根源を発見しないかぎり、また人々がこの根源が今日の貨幣制度に隠されていることを洞察しないかぎり、つまり、国民と政府が金の子牛の周

りを踊り続けているかぎり、われわれは日々破産に一步一步近付いていくことになるのである。

今日ヨーロッパでは、失業や植民地購買力の減退が、悲観的に語られている。だが、なにゆえ植民地主義者の購買力が減退したのだろうか。植民地主義者は、毎年何十億マルクもの利子をヨーロッパのレントナーに支払わなければならない。したがって、彼らは自分自身のために何も使うことができないのである。それに対し、レントナーはこの何十億マルクものお金を無邪気にも贅沢のために浪費する。そうでなければ、それらは、植民地主義者によって自らの生産手段の改善に、たとえば、鉄道の施設、機械の設置、あらゆる種類の道具の設置のために使用されたことであつたろう。このような状態にある植民地主義者が、もし利子という重しから解放されたならば、彼らの購買力は即座に増大し、あらゆるヨーロッパの工業は即座に全面稼働することになるだろう。そして生産手段の改善に比例して、植民地主義者の労働の生産性も増大し、植民地産物産の価格も下落するだろう。つまり、今日植民地からレントナーに送られてくる利子は、ヨーロッパ工業にとっての金の卵を生む鶏を殺しているということなのである。

第十六章 信用

貨幣は、需要を代表する。つまり、貨幣を持っている者だけが、需要を可能にする。たとえば、大量の商品を持っているけれども、貨幣を持っていない者は、マッチすら買うことができない。

銀行家の意志なしには、商品は店頭から一歩たりとも動かない。したがって、銀行家が貨幣を流通から撤回したならば、商品は腐り、資本は無益に失われていく。そして労働者は、資本の供給不足のために、飢えてしまう。つまり、商品の所有者は、自らの所有を自由に処分できずに、銀行家の恣意に従わざるをえないということなのである。

現行の貨幣の導入によって、生産者は無力になっている。それは、一大男ガリバーが小人たちによって何千本もの小さな糸によって縛られたように一、今や生産者、すなわち農民と手工業者が大地の上に縛られているのに対し、金庫の上にごく少数の銀行家が、堂々と身代金という称号をもって鎮座しているという構図なのである。

その際、生産者たちはこのような従属の状態に我慢しているかのようである。それに対し、彼らは、荒々しい暴力によって彼らを縛り付けている足枷を切断し、金庫とその中身を大海に投げ捨てることがないのだろうか。否、そうするには彼らは余りに愚鈍であるために、彼らは自分の商品を信用販売してしまう。換言すれば、彼らは物々交換に戻ってしまうのである。

今日、商品の本来の所有者、すなわち貨幣の所有者が自らの所有物を取引してくれない場合、生産者は自らの商品を、貨幣の仲介なしに、すなわち、貨幣と関係なしに交換しようとする。つまり、彼らは商人に商品を信用で供与しようとするのである。これは、商品を消費者に提供した際の代金から、この提供した商品の交換価値を得ようとするものである。

この方法はきわめて複雑で、危険かつ手間の掛かるものである。またそれは、絶えず順調に行くとは限らない方法でもある。しばしばこの純粋な物々交換の連鎖が、貨幣の介入によって中断される。だが、信用で販売される商品が辿る道がいかに複雑であろうとも、またこの方法に従うことがいかに困難であろうとも、信用制度は、貨幣所有者が生産者を縛り付けている足枷の暴力的爆破以外の何ものでもない。つまり、信用制度は以前の物々交換への後退以外の何ものでもないのである。そのように観察者の目には映る。

だが、貨幣は、物々交換の困難さを回避するために導入されたものである。そして今日、商品交換のきわめて大きな部分が信用という方法によって行われているという状況は、金属貨幣

が、今日の取引が貨幣に求めているところの要求を十分に充足させていないということの新たな証拠を、われわれに提供するものでしかない。

つまり、貨幣がその製造目的を実現しているならば、いかなる商品も、貨幣の干渉なしには、したがって、貨幣の助けなしには、その所有者を変えてはならないし、またいかなる商品も店舗から一歩たりとも動いてはならないのである。一言で言えば、その場合には、信用制度は即座に撤去されなければならないということなのである。

だが、信用制度の裏面にある途方もない混乱を知っている者は、信用制度が取引や流通に何をもたらすかという問いに対しては、おそらく「刑務所だ」と答えるだろう。

第十七章 19世紀末の取引

ちなみに言うと、アダムが電報を知らなかったように、ギリシアの賢人たちも今日の商業を知らなかった。それゆえ、彼らは、数千年前に次のようにわれわれに述べた。「貨幣は頑丈でなければならない」、「貨幣は摩滅してはならず、内的価値を持っていなければならない」、と。そして今日の国民経済学者も、オウムの如く次のような型に嵌まった言い方をする。「金は、その特有な特性のゆえに、良き貨幣になる」、と。そのような驚嘆すべき発見は、科学者に大きな名誉を授けるものである。だが、それは次のように聞こえる。「有能な郵便局員は、粗野で不親切であるにちがいない」、と。なにゆえ。「なぜなら、郵便局員は不親切であるから」、と。

その上、人々は次のように主張する。「貨幣は、商品交換を媒介すべきである」、と。だが、貨幣はこのような商品交換をいかにすべきなのか。また貨幣が商品交換を迅速に、確実に、廉価に行うには、貨幣をどのように改造すべきなのか。こうした問題は、アリストテレス以来一度として論究されたことがなかったのである。

金融恐慌、経済危機、失業、倒産、投機など

は、何を意味しているのか。

それらは、商品交換の妨害を意味している。では、商品交換を媒介するものはだれなのか。それは、貨幣である。

ところで、商人の膨大な商品在庫は、何を意味しているのか。それは、商品交換の停滞を意味している。では、商品交換を媒介するものは、だれなのか。それは、貨幣である。

銀行や取引所で働く人々、そして執行吏、セールスマンなどの何百万もの人々は、何を意味しているのか。このような人々を必要としているのは、だれなのか。それは、商品交換であり、貨幣である。

今日の貨幣制度の欠陥が明白であるにもかかわらず、人々はなお次のように主張する。「貨幣は、優れた交通制度となっている。なにゆえなのか。なぜなら、それは頑丈であるから」と。だが、なにゆえ貨幣は、商品—その交換を貨幣が媒介する—よりも頑丈である必要があるのか。その上、貨幣は流通から撤収させることもできるし、商品交換を任意に**中断**させることもできる。つまり、貨幣は、生産者を困らせることもできるし、資本を困難な事態に陥らせることもできるのである。

ところで、多数の商品の小売値が生産者価格よりも高くなるということは、周知の事実である。全般的に見た場合、商品の生産よりも商品の販売の方が、より多くの労働を必要とする。そして集金の方が、商品の販売よりも二倍の労働を必要とする。それにもかかわらず、人々は次のように主張する。「貨幣は、商品交換を容易にする」と。なんとまあ、独特の容易化であることよ。

今日の商業には、多数の人々が従事している。そのことから、商業上の競争は激しいものと信じている者がいるならば、その人は誤っている。

たとえば、賃金が安い部門での競争が激しいということであるならば、人々は、きっと次のように言うこともできるだろう。「手工業者のもとでの競争は激しい。なぜなら、そこでの賃

金は、もっとも低いからである」と。商業のもとでの競争が手工業者のもとでの競争よりも激しいならば、商人の平均所得は手工業者のそれよりも高いといったことは、ないだろう。だが、今日この点に関しては商人の平均所得の方がはるかに高い。[そのことが事実だとすれば]、なにゆえ商人のもとでの競争は、他の職業のもとにおける競争よりも激しくないのだろうか。

今日の商業[技術]を修得することはきわめて困難であるがゆえに、また芸術や科学以上に商業[技術]を修得することが困難であるがゆえに、さらに商業に必要な有能な人材を国民がなかなか提供しないがゆえに、商業のもとでの競争は、商人の所得を下落させるほど十分激しくはならないのである。

今日の商人は、貪欲な貨幣欲を持ち、手堅く、慎重かつ勤勉に、そして儉約的にならなければならぬばかりでなしに、大きな炯眼と社交的才能を持ち、—その他のいかなる身分にも見出だせないような—生理学的、化学的、物理学的知識をも身に付けていなければならない。だが、なにゆえ商業は困難であるのかという問いへの答えは、今日の貨幣制度が商品交換を困難にさせるということの中にも見出される。

すでに本章の冒頭に述べたように、今日、商品所有者の窮境をうまく利用し、貨幣の撤収によって商品交換を中断するということが、貨幣所有者の直接的利害になっている。

このような事態から、商人が成功するには予見しておかなければならないあらゆる種類の困難さという無限の連鎖が生まれてくる。彼がこれらのことを予見できないならば、彼は破産する。これが、商業における競争が激しくないことの理由なのである。

物凄い混乱と絶えざる価格変動をもたらす信用制度だけでも、どれほどの困難をもたらすことになるのか。そして金融恐慌である。

このような困難さが適切な貨幣制度改革によって廃絶されるならば、商業はあらゆる職業の中でもっとも容易な職業になるだろう。たとえ

ば、年老いたどのような老女すらも商業を遂行できるようになり、そして商人の所得も、より激しい競争にともなって下落することになるだろう。

われわれは、特定の人間たちが天候を制御し、貢租の支払いを強要するために耕作農民に困難をもたらすことが、彼らの利害になっている場合を想定してみよう。今やこうした天候所有者の企みを回避するには、農民は、化学と物理のあらゆる法則、外国語の会話、法律などを研究しなければならないだろう。けれども、ジャガ芋耕作は大きな困難さを伴い、農民はそのような研究への精神的能力を持っていない。そのために農民は、天候所有者によって苛められることになる。だが、その結果はどうか。ジャガ芋農民の競争は減退し、ジャガ芋の価格は騰貴し、その上天候所有者によってもたらされる困難さが大きくなればなるほど、それだけいっそう農民は、高い価格を手に入れることができるだろう。これと同じ状態にあるのが、商業なのである。

第十八章 全世界との対立

全世界に流布している理論に反対するような者は世間のつまはじきにされ、具体的証明によって自らの主張を裏付けることができない状態に陥ってしまう。なぜなら、彼は狂気の人とみなされるからである。

私が上述してきたすべての主張は、アリストテレス以来今日に至るまでの、貨幣制度についての、これまで流布してきたあらゆる理論ときわめて直接的な矛盾関係にある。それゆえに、こうした私の主張への証拠が日常的に存在していなかったならば、またすべての商人にとってそのことが日常茶飯事のことでなかったならば、私は酷い目にあっていただろう。だが、幸いにもそうではなかった。

このような倒錯した事態を示すために、私はここでひとつの証拠だけを提出しよう。

ここアルゼンチンでは、毎日次のような決まり文句が繰り返し聞かれる。

「大統領選挙後、信用が戻るや否や、金プレミアは低落するだろう。つまり、アルゼンチンの紙幣は購買力を、つまりその価値を騰貴させるだろう」と。だが、今や信用の回復の最初の作用のひとつは、銀行が信用の供与に対して自由になるということ、つまり、貨幣が金庫から出て行き、急速に流通するということ、したがって、需要が増加するということなのである。

だが、需要の増加は価格の騰貴を随伴する。こうした価格の騰貴は外国商品を〔国内への輸入に〕誘因する。だが、輸入商品は、金によって支払われなければならない。〔つまり、信用の回復は、以下のような論理的関連を辿る。〕信用の回復は、急速な貨幣流通を引き起こす。この急速な貨幣流通は需要を増加させる。需要の増加は価格を騰貴させる。そして価格の騰貴は輸入を容易にし、輸出を困難にする。輸入商品は金の購入を誘因する。この金の購入は金プレミアの騰貴を引き起こす。以上のことを簡潔に要約すれば、信用は直接貨幣価値の減価、金プレミアの上昇に作用するということなのである。したがって、人々がここで信用全般に期待していることの反対の事態が、まさしく起きることになる。

このような事態は、多数のアルゼンチンの金融王たちの野望をいかに破滅させたことか。多数の投機家がこのような事態によっていかに自分の資産を失ったことか。信用の回復にもかかわらず、金プレミアが急上昇した場合、多数の者がいかにけげんな気持で首を傾げたことか。

金本位制度の国々では、信用がどのような作用を及ぼすのか。商品価格、株によって示される生産手段の相場、賃賃料、給料、賃金などの騰貴である。つまり、貨幣は価値を失い、購買力を減じるのである。なにゆえ、アルゼンチンではそうした事態とは反対のことが起こるといえるのだろうか。信用がアルゼンチンではそうした事態とは反対の作用を及ぼすいかなる根拠も、

絶対に存在していない。したがって、信用がもたらす諸結果は、大統領がAかBかのどちらになっても、まったく関係のないことなのである。

第十九章 貨幣概念の定義づけの続き

かくして今や、私は、マモンという雄鳥から十分に羽根をむしり取ったと考えるものである。だが、その尾には残りのわずかな羽根があるし、小さなむく毛も広がっている。これらをむしり取ることは、とても退屈なことであるが、そのことを避けるならば、われわれは画竜点睛を欠くことになってしまうだろう。

ところで、金がいかなる商品でもない場合—金がいかなる内的価値も持たない場合—、つまり、金が等価物でもなければ、価値測定者でもない場合、そして金が一紙幣の75ペニヒが金の100ペニヒと同じ購買力をもつことができるように—適切に紙幣によって置換される場合、私は問いたい。「貨幣とは本来何なのか」、と。

私は、貨幣を単なる受取書、すなわち—紙幣本位制度の国々では—**国家**が、そして—金属貨幣が流通しているところでは—**人類**が、市場に**商品**を供給した人々に授ける受取書、つまり、以前に提供した商品の等価分をその国の商品在庫からもらい受ける権限をその所有者に付与する受取書と見なす。

国家は、まずそのような多数の受取書を流通させる。それとともに、このような受取書の提示と引き換えにだけ商品が譲渡されるという慣習を、国家が決める。そして需要と供給の法則が、この受取書の価値を決定する。たとえば、国家が多数の受取書を発行したならば、つまり、国家が多数の鑄貨を鑄造したならば、需要は増大し、価格は騰貴する。そして受取書の購買力は低落する。それに対し、国家が受取書を僅かしか発行しなかったならば、需要は減少し、価格は低落する。そして受取書ないし鑄貨の購買力は増大する。

ひとつの商品の価値はまったく個人的な概念であるがゆえに、国家は受取書にいかなる価値も付与しない。受取書は、1マルク、10ルーブル、100シリングなどと呼ばれる。だが、同様に受取書は、コフキコガネ、アトム、雨の滴などとも呼んでもよい。それがどう呼ばれようとも、その呼び方は、当のものの価値とはまったく関係がないからである。

その際、商業においては大小の額の受取書が必要となるがゆえに、受取書は1、50、1000という数字を帯びたものになる。こうならなければ、数字は余計なものになってしまうだろう。かくて商品の費用にしたがって、10、50、1000の受取書と呼ばれることとなる。

ところで、ドイツ帝国の1マルクとは、どの程度の価値であるのか。1マルクで抜け目のない料理人は、若いガチョウを手に入れてしまう。だが、未熟な娘は、同じ額の貨幣と引き換えに古い動物の肉しか手に入れられない。このことから分かるように、1マルクの価値はきわめて不確定なものでしかない。このように貨幣の購買力は、その所有者の熟練度に依存しているのである。

けれども、全体として見れば、マルクの価値、すなわち貨幣の購買力は、まったく一定の経済的法則に依存している。

たとえば、貨幣が均質的に流通している場合には、つまり貨幣の流通が商品生産と同一の歩調をとっている場合には、貨幣価値は不変のままである。それに対し、貨幣流通が妨害される場合には、つまり貨幣が流通から撤収される場合には、貨幣価値は大きくなる。他方、貨幣流通が促進される場合には、つまり一週間にわたる需要が一日に集中する場合には、貨幣価値は小さくなる。

おおよそその場合、貨幣の価値は需要と供給によって決定される。その場合、貨幣量と商品生産〔量〕が等しいままであるならば、貨幣価値はその流通〔速度〕にだけ依存することになる。

それゆえ、この場合、貨幣の流通〔速度〕は

貨幣の価値規定の中の主要な要因になる。したがって、絶えざる価格変動、—今日の商業を攪乱するような—貨幣の購買力の絶えざる変動は、貨幣流通における不規則性の結果にすぎない。貨幣流通の単なる促進によってだけでも、すなわち、たとえばロンドンの決済所のような制度の全般的導入によってだけでも、—以下のことが望まれる場合には—あらゆる商品の価格を10%、20%、50%なおそれ以上騰貴させることもできるし、金の購買力を50%、否90%も下落させることもできるだろう。なぜなら、前述の手段と類似した手段によって貨幣流通を促進させるならば、需要と価格が騰貴するにちがいないということに、まったく疑問の余地がないからである。それでも、多数の人々は、金の価値が貨幣流通のようなまったく不確定な要素に依存しているという事実には無知であるために、金の価値がまったく流動的であるという事実を理解できないでいる。それに対し、金の価値が流動的であるという事実が現実を起こっていることを確証するには、1870年以来今日に至るまでの時期にドイツで生じている大きな価格変動を考察すれば十分だろう。

だが、貨幣の流通は、本質的には、そのように人々が信じているほど不確定な要素ではなく、一定の自然法則に依存している。したがって、人々が貨幣を一個人的損失なしに一投機目的のために流通から撤収することができなくなれば、貨幣流通は絶えず均質的になり、商品生産と厳格に歩調を合わせていくようになるだろう。

いずれにしても、貨幣は、結局のところ、商品生産よりもより急速に流通することができない。なぜなら、この場合、需要の増大と価格の騰貴が起こるからである。だが、価格騰貴は、貨幣ストックの減少を意味する。そして貨幣ストックの減少は、他方では、需要の減少と貨幣流通の緩慢化をもたらす。だが、貨幣が商品生産よりもより緩慢に流通するならば、貨幣もまた流通不可能になる。なぜなら、この場合価格は下落し、価格の下落は貨幣の増加を意味する

からである。そしてこうした貨幣ストックの増加は、需要の増加を引き起こす。つまり、需要の増加は流通の促進と同義になるのである。

たとえば、商品が高い価格水準にある場合、低い価格水準にある場合よりもそれぞれの商品と引き換えにより価値の低い貨幣しか自由にできないということ、またその結果として、高い価格水準は需要の減少を引き起こし、価格を下落させるにちがいないということ、こうしたことに注目するならば、急速な貨幣流通の結果としての需要の増加が、急速な貨幣流通の作用を廃棄するということが分かるだろう。したがって、投機を度外視すれば、貨幣流通は、全体的に見れば、商品生産と歩調を保って進行するにちがいないということ、そして「商品価格と貨幣価値との」一時的乖離は価格変動によっては正されるにちがいないということ、こうしたことも分かるだろう。その際、このような価格変動の結果を見た場合、その是正は確かに痛ましいものになる。

というのも、貨幣を生産に適応させる以外には、つまり、生産が増加したり、供給が増加する場合、価格下落や生産制限を回避するために、貨幣量を増加させたり、貨幣流通を促進させたりする以外には、今日、労働者の解雇などによって生産を貨幣ストックに適応させる方法しか残っていないからなのである。

この世界に、今日の貨幣制度のこうした諸結果以上に笑うべきことがあるのだろうか。労働者は、現存の貨幣が、生産の増加によって増大した商品を価格の下落なしに交換するのに十分でないことを祝わなければならないのか。いずれにしても、今日の貨幣制度は、周到な思考の所産であるとは考えられない。つまり、今日の金属貨幣制度は、数千年前に開催された大きな国際会議で白熱した討論の後に、すなわちその賛否両論の主張を詳細に突き合わせた後に厳粛に、「金は交換手段、すなわち、人間のもっとも重要な接着剤である」と宣言した後に導入されたものとは、とても考えられないからである。

それについては何も分からない。人間がなお類人猿の発展段階にあった当時、人間たちは色とりどりの羽根で飾ることを好んでいた。金もまた、その光輝く外見のゆえに、そのような飾りに利用されていた。今や、金は実際に希少なものとなる一方、当の類人猿もまた飾りへの要求が大きくなった。そのため、金は絶えず買い手を見出だした。そして持ち運びに便利であるということとも結び付いて、次第に金を交換手段として使用する状態が生まれたのである。

その際、**商業の必要**は顧慮されなかった。金は商品交換を実際に容易にするのかどうかといった問いにも、**だれも一度たりとも**答えなかった。当の類人猿は、そんなことを考えもしなかったし、ましてや品質の改善などまったく考えもしなかった。

けれども、それ以上に注目しなければならないのは、大昔の人間がまったく偶然に貨幣制度を考案した時、現代の複雑極まりない商業の必要をどの程度考慮したというのだろうか。

実際、誇り高きネアンデルタール人が今日の商業の必要についてどの程度の理解を持っていたのだろうか。5千年後の今日、なおわれわれの博物館のミイラとして無益に復活を待っているエジプト人は、需要や供給についての何を理解していたというのだろうか。

したがって、まったく偶然に野蛮人によって考案された貨幣制度を、われわれはこの啓蒙の世紀の終わりにもなお堅持すべきだというのだろうか。あらゆる国家的交通制度の中でもっとも重要な制度をわれわれは、類人猿の飾りへの要求に、すなわち、われわれの理性とは関係のない偶然に任そうというのか。その場合、理性はいったいどこに残っているというのだろうか。

第二十章 最古の古文書の切れ端：紀元前9000年の受取書

今やマモンは、毛を篋りとられ、焼かれている。われわれは、それを味わってみることにし

よう。

うわー、お前はとてつもなく古い動物で、木材のようにとても固い。お前は、いずれにしても、エジプトのミイラよりも古い存在なのだ。

おー、お前はとてつもなく重要な古い交通制度である。だが、お前は下劣なマモンでもある。お前は、人類が快活でおとなしく、投機などを知らなかった時代に誕生している。人間が純潔を失わなかった間は、お前は自分の目的をよく果たした。だが、今や、お前は取引所の人間のもとでは赤子のように見える。

供給と需要は価格を、[貨幣の] 価値を、つまり貨幣の購買力を決定する。このことはまったく単純であり、そのかぎりでは子供にも分かることである。だが、こうした需給による価格決定は、ひとつの難点、すなわち高利貸しの机の上では機能しないという隠された難点をもっている。

ひとつの商品の価格交渉をする場合、販売用に提供される商品量がどれほど多いのか、また需要がどれほど大きいのかということばかりでなしに、**とりわけ**購買者と販売者がどれほど**緊急度**をもって交渉しているのかということにもかかっている。

たとえば、販売者が次のような事態を認識するならば、すなわち、貨幣所有者が商品を所有することに急いでいるのを認識するならば、彼は冷静に価格をいくばくか高めに吊り上げることができるだろう。それに対して、購買者が次のような事態を認識するならば、すなわち、商品所有者が自らの商品を処分することに急いでいるのを認識するならば、彼がその購買を延期しようとする場合には、つまり彼が需要を明日に延期しようとする場合には、彼は確実により安価に商品を手に入れることができるだろう。

ところで、商品所有者は絶えず次のことを、すなわち、商品が腐朽したり、盗まれたり、火災にあつて商品が駄目になったり、また販売できないために、彼が**経費**を出してまたもや商品を家に持ち帰り、そこに貯蔵しなければならない

いということを恐れているのは、事実である。

それゆえ、商品所有者は、絶えずあらゆる商品が例外なしに腐朽していくという自然法則の圧力のもとにあるといつてよいだろう。〔その場合、〕これらの商品がより急速に腐朽すればするほど、その圧力もまたそれだけいっそう大きなものになるだろう。

その際、あらゆる商品の中でもっとも重要な商品、商品のもっとも純粋な形態、すなわち、労働者の肉体に新鮮な形態で宿っている商品は、使用されることがないならば、即座に多くの農産物と同様に腐朽してしまう。

かくして商品所有者は、常に自分の商品を他者に押しつけようと特別に**急いでいる**。つまり、**供給**は、常に商品が灰燼に帰すという自然法則の強力な圧力のもとにある。

だが、貨幣所有者、すなわち需要の場合には事情が異なっている。

〔それはこうである。〕人々は、貨幣の製造のためにあらゆる金属の中でもっとも頑丈な金属を求めた。金は腐らないし、錆びることもない。それは盗賊から守るにも容易である。鼠や蛾が金を害することもないし、それは酸化することもない。またそれは、運送費もいらぬ。家屋が延焼した場合、すべての商品は失われるけれども、金は焼け跡の灰の中から拾いだし、それに付着した汚れを洗えば、元通りになる。そしてその所有者は、市場で彼の好みの商品を見出ださないならば、再び家に持ち帰り、何日でも、何か月でも、また何年でも待つことだろう

かくして貨幣所有者には、すなわち、**需要**には、万物はこの世において灰燼に帰すという自然法則の圧力がかかることはない。つまり、**需要**は、つねに**供給**に比して**計り知れないほどの利益**を有しているのである。それゆえに、価格決定に際して、その他の条件が同じであるならば、価格はきまって**貨幣所有者の側に、つまり需要の側に有利になる**のである。

〔以上のことをまとめれば、次の通りになるだろう。〕社会あるいは国家は、商品の販売者

に受取書、すなわち全般的な商品在庫から当該価値分をいつでも取り戻すことのできる権利を彼に与える受取書を発行する。つまり、国家がこの受取書の当該価値を彼に保証する結果、商品交換はこの受取書を媒介にだけで、つまり貨幣を媒介にだけで行われるようになる。だが、その場合、需要は貨幣所有者の手に握られている。つまり、貨幣所有者は商品を意のままにできるのである。それゆえに、貨幣所有者が商品比率を決定する完全な自由をもたないならば、すなわち、貨幣所有者が商品の保持に必要な経費を負担することから免れられないならば、商品交換は百パーセント順調に進むことだろう。

かくして、需要が完全に貨幣所有者の掌中に握られている場合でも、つまり、商品所有者が貨幣所有者の恣意に完全に依存している場合でも、需給による価格決定が十全に貫徹しうのかどうかという問題を、人々はいっと厳密に検討する必要があるだろう。

たとえば、一方の供給は「市場への提供を」延期することができないし、商品は、その所有者に出費を与えることなしには、市場を出ることができない。したがって、需給による価格決定が歪曲されないことを望むには、需要が延期されないということ、つまり、貨幣も「商品と同様に」貨幣所有者に損失を与えることなしには市場を出ることができないということ、こうしたことが必要になる。だが、こうしたことは、今日の貨幣制度のもとでは不可能である。なぜなら、[今日の貨幣制度のもとでは]供給が一日たりとも損失なしには「市場での販売を」延期できないのに対し、需要は、いつでも自由に需要の所有者に損失を与えることなしに「市場での購買を」延期することができるからである。しかるに、流通からの貨幣の撤収によって、すなわち、需要の延期によって、供給は増大する。なぜなら、販売用商品量は、とどまることを知らない新たな生産によって増加するからである。その結果、商品の価格は下落する。かくして貨幣価値は、需要の延期に比例して騰貴すること

になる。

要するに、社会あるいは国家が、錆びていく商品の交換手段として錆びることのない対象物を導入した結果、需給による価格決定の作用が歪曲され、需要、すなわち、貨幣に供給が持つことのない利点が与えられることになったのである。

つまり、社会は、金属貨幣の導入に際してひとつの**失敗**を犯したのである。

大昔の類人猿—今日の貨幣制度、すなわち、あらゆる国家的交通制度の中でもっとも重要な制度の存在は、彼らが用いた装飾品に負っているのである—は、こうした発明によって次のような証拠、彼らは一度たりとも受取書や納品書を正しく振り出すことができなかったということの証拠を提供したのである。**なぜなら、彼らは、今日の農民が犯しているのと同じ失敗、すなわち、今日の農民が自分のジャガ芋を販売する際に、その購買者にいつでも好きな時にジャガ芋との取引を行う完全な自由を与えているのと同じ失敗を犯したからであった。**かくして今や、購買者がジャガ芋を引き取らないかぎり、農民はジャガ芋を保持し続けなければならないし、また農民が貨幣を持っていないかぎり、農民はジャガ芋を交換手段として利用することもできない。つまり、今日の農民は自縄自縛の状態に陥っているのである。

ところで、今日取引対象となる商品は、予め[取引以前に]販売され、担保にされ、譲渡されているのである。なぜなら、貨幣の所有者は、自分だけが購入する権利を持つことで、商品の運命を自由にできるからである。それに対し、商品所有者は、貨幣所有者が現れるまで、つまり貨幣所有者がその所有物を購入してくれるまで、辛抱強く待たなければならない。この時以降初めて、商品はその所有者にとって交換対象として役立つものになるのである。

いずれにしても、貨幣問題には、いかなる小さな誤りも存在してはならない。たとえば、リスが梢の実をとる際に落下させた雪が大雪崩の

原因になりうるように、不可視の経済的失敗の結果が何千年もの経過の中で全世界を覆って、全世界を窒息させてしまうからである。では、いったいマルクスは、貨幣制度のこのような欠陥を発見したのだろうか。また彼は、それがどのような結果をもたらすのかを知っていたのだろうか。

マルクスは、このような欠陥を発見しなかった。彼は、貨幣をニシン、石炭そして石油のようなひとつの通常の商品と見なした。そして彼が貨幣に発見した唯一の欠陥は、貨幣が人間のもとで不平等に分配されているということだけだった。

だが、今やわれわれは、彼の失敗を追跡する前であっても、そして商業が金属貨幣の導入なしにも、いかに発展しえたのかという問題を見る前であっても、われわれは、類人猿の有名な発見—国民経済の何ものにもかえがたい素晴らしい制度—、すなわち、錆びることのない対象物を錆びていく商品の交換手段に導入した制度がもたらした、またもたらすにちがいない重大な損害をより適切に評価できるようになっているだろう。

第二十一章 バラタリア [島]

先天的な盲人は、白と黒、明と暗の相違を決して把握することができない。また先天的な病人は、いかにしたら健康者の気持ちになれるのかを決して理解することができない。

人間全般も、同様の状態にある。数千年来、金や金属貨幣に抑圧され、苛められてきたために、アダムの子孫は、もっとより良い状態があるという意識をなくしている。それだからこそ、なにゆえ多数者が、今日の社会状態をまったく正常のものと見なしているのか、またなにゆえ少数者が、社会的な不平等状態を全般的に認識しながらも、その原因を人間の本性の中や生業の本性の中のどちらかに求めようとしているのかということの説明もつくのである。つまり、前

者は、状況を改善するための提案をまったく**何も行わない**。なぜなら、彼らの見解によれば、そうなるためには、人間をまったく違った存在に改造することが、必要となるからである。それに対し、後者は、改善の唯一の可能性を共産主義的生産様式に求めるのである。

両者とも、[私に言わせれば] 先天的な病人である。両者とも、金の子牛の周りを何度も踊る中で、自分の惨めさを認識する能力を失ってしまったのである。

実際、人間が金に対して卑屈な態度をとるなどといったことは、きわめて滑稽なことのように見える。そればかりでなしに、彼らは次のことを信じきっている。「現世は金と一蓮托生の関係で過ぎて行く。」「生活は金という基礎なしには有意義に過ごせない。」「人間の幸運は金で評価される。したがって、幸運な人間は、多くの金を所有しているにちがいない」と。このように人間の目は執拗に金に注がれ、その唯一の目標も、金になっているのである。

ところで、金とは何か。金とは、幻影、生命のない鉱物、何の役にも立たないものである。またその価値も、紙片の切れ端が金の代わり—その代わりを果たすのは、耳輪や鼻輪ではなく、交換手段の機能である—を果たした瞬間には、何もなくなってしまうものでしかない。

私は、ベラミーたちの幻想世界については多言を弄するつもりはない。ここで私が考えるのは、人々がそのような国家制度にいかん到達するのかを知らないかぎり、そのような幻想は無益であるということだけでしかない。

つまり、私がここで読者に語ろうとしているのは、そのような幻想ではなく、交通についての簡単な事柄なのである。それは、錆びていく商品の錆びることのない交換手段に代わって、商品よりも良くも悪くもないひとつの対象物—それは、その他のあらゆる商品と同様錆びていくひとつの対象物である—を商品交換の交換手段として導入するならば、論理的かつ不可避免的にも、交通は発展していくに**ちがいない**という

論点である。

そこで、われわれは、ダビデイス女史の料理書にしたがい、一方の手に一塊の土地を掴み、他方の手に移民船を掴もう。それからわれわれは、この一掴みの土地を静かな大洋のどこかに投げ捨てて、そこを島としよう。またわれわれは、移民船もその近くの海に投げ捨てて、航行中としよう。だが、この移民船は新しく生まれた島に停泊する前に、岩礁にぶつかって破壊されてしまったとしよう。さらに、われわれは、乗客は不快な状態から脱出し、彼らは衣服を乾かすために浜辺にたどり着いたと仮定しよう。

移民者たちは、自分たちが大洋の囚われ人になったことを認識した。彼らは、このような認識から唯一の正しい結論、すなわち、彼らは、生き続けるためには労働しなければならないという唯一の正しい結論を引き出した。

そこで彼らは生産し、自らの生産物を交換しようとした。そしてこのような交換のために、彼らは貨幣を必要とした。だが、貨幣はどこにも存在していない。かくて大いなる窮境と必要は、発明の母となった。

「聞きたまえ」とヨーゼフ・ハイエン氏は叫んだ。「人々は、アリストテレス以来今日に至るまで、絶えず次のように主張してきた。『良き貨幣は頑丈であり、それ自体のうちに価値を持つべきである。そのような貨幣だけが、商品交換を迅速に、確実にそして廉価に媒介することができる』、と。だが、われわれは、商品交換にかんするかぎり、われわれの以前の故郷では、頑丈な貨幣が「商品交換を迅速に、確実にそして廉価に媒介するという」こうした諸結果をもたらすことがまったくなかったという体験をしてきた。それゆえ、われわれは、**頑丈でもなければ、それ自体の中にいささかの価値ももっていないような貨幣を作るべきである**。したがって、私は、この立派な樫の実を貨幣とすることを提案するものである。この樫の木はここ以外島のどこにも存在していない。そこで、われわれは、われわれの銀行家を守るために塀を

作り、偽造貨幣からわれわれを守るために見張りを立てるといふことが必要になる。こうして次の収穫の際に、われわれは1000キロの檜の実を摘み、それを貨幣とした上で、われわれの間で分配する。それとともにわれわれが、檜の実と引き換えにだけ商品が売買されるという協定を結ぶならば、この檜の実はいまもなく交換手段としての市民権を得ることになるだろう。そしてわれわれが檜の実での税金の徴収を行うや、この貨幣に強制的公定相場が与えられるとともに、このような市民権の獲得はもっと容易になるだろう。

その際、われわれは価値単位をグラムと決定する。そしてこうした1グラムの価値は、需給によってまもなく示されることになるだろう。しかし、それでもあらゆる取引の際に、一販売者は、自分の商品を測定し、包装しなければならないが一貨幣もまたたえず測定されねばならなくなるならば、[販売者に対し] 購買者、すなわち貨幣所有者がどうして優位に立つのか、私には分からない。」

以上の試みには何の費用もかからなかった。それゆえ、ハイエン氏の提案は採用され、収穫期に1000キロの檜の実が採集され、貨幣として、移住者に平等に分配された。

[こうなっても]、だれも1グラムの檜の実がどれほどの価値であるのかを、知らなかった。けれども、だれもが次のように主張した。「檜の実はいま、自分の生産物と等価な商品を購入することができる」、と。それゆえに、だれもが檜の実を事前に「購入用途別に」分類したのであった。

「私は、ここに10エレの麻布を持っている。それは、私の8日間の労働の生産物である。私は、この10エレの麻布と引き換えにこれまでに10ポンドのパン、5ポンドのバターそして2ダースの卵を手に入れた。

今や私は、これらすべての物品を貨幣によって購入しなければならないがゆえに、私は、私の10エレの麻布と引き換えに一パンなどを購入

できる一檜の実をより多く手に入れなければならない。われわれが、10エレの麻布は私に分配された100グラムの檜の実と同じ価値であると仮定するならば、10ポンドのパンは約30グラム、5ポンドのバターは60グラム、そして2ダースの卵は20グラムの価値である。他の人々がそれ以上の価値を私に要求するならば、私は麻布の価格を引き上げることとなるだろう。」

頭の中でこのような計算を素早く行ったハイエン氏は、市場に向いて、似たような計算をしてきた他の島民と遭遇した。

その際、すべての者は、予め購入すべき商品と販売すべき商品の価格を自己の貨幣手段にしたがって計算していた。それゆえ、商品はすでに檜の実のグラム価格をもって市場にやってくるのである。だが、供給と需要の間にはかなりの相違があった。

たとえば、パン屋は、パンと引き換えに30グラムの代わりに40グラムを要求している。そのため、ハイエン氏は8ポンドのパンしか購入しなかった。それに対して、バター商人は60グラムではなく、40グラムを要求しているにすぎない。それゆえ、ハイエン氏は、2ポンドも多くの、すなわち7ポンドのバターを購入した。ハイエン氏の知人は、彼に次のように語った。「パン屋がパンをより高い価格で販売すれば、だれも彼のパンを購入しないだろう。そしてその結果は、パン屋がその日にもパン価格の引き下げを強いられることになるだろう。それに対して、バター屋の女将は、売り急ぎ、つまり余りにも安価に販売していることにまもなく気付くだろう。その結果、彼女はバター価格を引き上げることだろう。ハイエン氏も、その麻布を当初は自らの見積価格で販売したが、パン屋と交渉後は調整を加えた」、と。

「貴方が私にパンをもっと安く提供するならば、私は貴方に麻布を貴方の希望通りの価格で与えるだろう。だが、そうでないならば、貴方は自分のパンを持ち続け、私は自分の麻布を手元に置き続けることになるだろう。」

かくして、パン屋は、自分のパンを腐朽させるのか、それとももっと安価な価格で提供するのかという二者択一の前に立つことになった。だが、パン屋は、後者を選択した。その結果、ハイエン氏は、自分の欲しかったすべての商品と当初から所有していた100グラムの貨幣とを持って家に戻ったのである。

手短に言えば、商品は当初自らの概算の価格を付けていたけれども、島民は多少とも、1グラムの榧の実貨幣がどれほどの価値を持っているのかということを知っていたのである。確かに、多数の小さな価格齟齬が存在したが、これらの齟齬はまもなく消滅するに至った。というのも、供給と需要が、短期間に堅固な基礎をもった価格を与えたからである。

ところで、この新しい貨幣は、島民が欠点と見なしているようなひとつの特性を持っていた。それはかなり急速に萎びるということである。たとえば、本来100グラムあったものは、次の市場開催日には99グラムの重さになるといったようにである。そのため、すべての者は「市場開催日ごとに」1グラムの損失を被ることとなった。

このような事態は次のような結果を、すなわち、すべての者が、自らの損失を他人に押し付けるために、自らが自由にできるすべての貨幣を絶えず商品の購入のために市場に持ち込むという結果をもたらしたのである。

その結果、需要は絶えず完全に均質的であり続け、価格もいかなる大きな変動を被らなかった。[たとえそうした変動があっても]、それはせいぜい小さな恒常的価格下落が認められる程度でしかなかった。ヨーゼフ・ハイエン氏は、そのことに非常に驚き、彼は、ただちにその原因を、貨幣の重量の減少ないし貨幣価値の減少によって需要と価格とが同じ比率において下落するという事情の中に発見した。そして彼は、貨幣の量は重量の減少によって年間10%減少しているにちがいないと計算した上で、次のように述べた。

「これは、新しい貨幣を補充することによってだけ阻止できるにすぎないひとつの欠陥である。したがって、われわれは、貨幣量の減少に比例して新しい貨幣を流通させなければならない」と。さらに彼は、次のように続けた。「100キロの10%は、100キロである。これは、われわれの共同体が支出すべき金額である。つまり、これは、われわれが税として徴収すべき金額である。

だが、われわれは、いかなる税をも徴収する必要がない。なぜなら、われわれは、われわれが無費用で榧の木から摘んできた新しい貨幣をわれわれの職員に支払えばよいからである。このようにして新しい貨幣を補充すれば、価格下落は阻止することができるのである」と。

そうして以来、価格はたえず完全に同じままであり続けた。なぜなら、貨幣の絶え間のない重量減少による絶えざる需要の減少は、漸次的に価格下落を引き起こしてきたのに対し、新しい貨幣の発行が同じ比率において需要を増大させた結果、需要と供給は、たえず均衡を保ち続けてきたからである。

ところで、人々は、自分の商品を、日々その価値を減少させている貨幣と引き換えに販売するなどとは考えないだろう。したがって、人々は、そのような減価していく貨幣の受け取りを拒否するだろう。だが、商品が日々その価値を減少させているというのもまた、同様に事実なのである。それにもかかわらず、商品所有者も、時間の経過の中で生まれる「榧の実貨幣の」損失のために、貨幣を繰り返し他の商品の購入に利用するように誘因されるのである。

かくして彼が商品あるいは貨幣のどちらかを所有していようと、すべての者にはまったくどうでもよいことになった。なぜなら、両者とも等しく損失を被り、しかもこのような損失に対しては防ぎようがないからであった。

だが、貨幣は直接個人的消費のために使用されることがないがゆえに、また同価値の二つの商品の間では、たえず自らが消費するものを選

択するがゆえに、すべての者は、なによりもまず貨幣よりも商品を選好し、更に商品の中でも個人的必要のために消費する商品を選好したのである。

その結果、すべての者は、自己の生産物を絶えず販売向け商品として〔市場に〕提供し、〔市場で自己の生産物の譲渡と引き換えに〕手に入れた貨幣で他の生産物を購入した。こうしたことをすべての生産者がしたがゆえに、すべての商品は絶えず販売され、購買されることとなった。

かくして**供給**は、年々絶えず均質的になった。なぜなら、島民は年々労働し、その生産物を絶えず即座に、つまり、銷や腐敗への恐れからだちに市場に持ち込むがゆえに、絶えず商品が均質的に市場に出回ることになったからである。

だが、**需要**も年々均質的になった。なぜなら、貨幣が損失を生むために主婦は、年々貨幣を均質的に市場に持ち込むことになったからである。

このように**需要と供給の両者が均質的ならば、同じ価格のままである。この島の場合もそうだった。**

しかるに、収穫物の価格は、収穫の多寡に応じて変動した。それでも、農民が自らの商品と引き換えに得た貨幣の総量は、絶えず多少とも均質的なままであった。なぜなら、需要が絶えず均質的であったからにはほかならない。たとえば、収穫が良かったならば、その価格は下落したし、またその逆の関係もあった。だが、このような価格変動は、その他の商品にはそれほど大きな影響を及ぼすことがなかった。

またこうした事態は、時が経過しても変わらなかった。生産手段の改善によって生まれた剰余生産物の生産、その結果としての供給の増加は、価格の下落を引き起こしたけれども、再び価格を通常の水準に騰貴させるには、即座に新貨幣を発行すればよかったのである。

他方、貨幣が何らかの理由によって通例の場合よりも急速に流通するといった事態、すなわち需要が増加し、価格が騰貴するといった事態

も生じたけれども、このような悪い事態は、新貨幣の発行制限によって容易に除去されたのである。

したがって、ハイエン氏は、流通に使用されている貨幣の補充の中に一人々がそう考えなかったのとは反対に一単純ではあるが信頼に足る、正確な価格規制者を見たのである。

かくして貨幣は商品よりもより良い存在でないがゆえに、すべての者は、自分の貯蓄を商品形態で行った。つまり、すべての者は貯蔵室を設置し、そこを商品で、〔もっと詳細に言えば〕彼自ら生産した商品ではなく、彼が個人的に消費することのできる商品で満たしたのであった。

それゆえに、すべての商品は完売された。なぜなら、絶えず自らの貯蔵室用の商品を求める人々がいるからであった。だれかが現金を必要としたならば、彼は、販売用の商品を提供するだけでよかった。そこには絶えず購買者が存在した。それというのも、商品が貨幣と同等な存在であったからにはほかならない。

その自然的結果は、あらゆる店舗や商人がどこにも存在しなくなったことである。なぜなら、商品は店舗に滞留する時間を持たなくなったからである。今や**商品は、絶えず生産場所から消費場所へと流通した。**それゆえ、今や商品価格には商業費が付加されないばかりか、**すべての者は、確実に自らの商品の等価物を手に入れることができるようになったのである。**

それと同時に、今や取引や値引き交渉に多くの時間が取られるということもなくなった。なぜなら、商品はかなりの程度固定的な価格を持っているからであり、また両方の当事者、すなわち貨幣所有者と商品所有者の両者とも、取引がうまくいかなかった場合には、貨幣あるいは商品とも同じように損失を恐れなければならなくなったからでもある。他方、事業が順調にいった場合には、両当事者のどちらも、他方の人を自分の保護者ないし恩人と見なした。そこには手練手管といった言葉は存在しないばかりか、販売者は、もはや貨幣やその所有者に平身低頭

することもなかった。なぜなら、販売者は、貨幣所有者と**同等の商品所有者**と自負しているからであった。

今や貨幣は商品よりもより良い存在ではなくなったがゆえに、すべての者は、予め自らの生産物の売上代金と引き換えに何が購入できるのかを考えたし、また店舗にない場合にも、貨幣と引き換えに商品を実際に手に入れるために、**すべての者は、予め望みのものを注文した。**

その結果、すべての者は、注文に応じて労働するようになった。そしてすべての商品は、予めその購買者を持つことになった。かくて、家屋の中の最良の、もっとも風通しのよい、もっとも健康な部屋にショーウィンドーを備えたり、商品で埋めたりする必要がなくなり、むしろ手工業者の家族は、道路側の部屋で生活し、小部屋をお得意先との応接に利用するようになった。また手工業者は、50のランプで小部屋を照らすことが不必要となり、鯨油ランプで十分になる一方、良質なランプを自分や自分の家族のために利用するようになった。

そればかりでなしに、**手工業者は、注文に応じた労働を行っていたがゆえに、彼は、自分の労働の購入者の存在を知っていた。**したがって、注文が少なくなっても、また価格引きが効果のないものになっても、彼はその商品への必要が減少していることを予め知っているから、彼は—その価格の騰貴傾向が需要の増加を推測させるところの—他の商品の生産に容易に移行できたのである。

だが、そのような事態は、稀にしか生じなかった。なぜなら、すべての商品交換は、絶えず均質的に遂行され、注文の減退によって絶えず予め彼に知らされたからである。

かくして、すべての者が自分の貯蓄を商品形態で行ったがゆえに、またすべての販売が即座の購買を引き起こしたがゆえに、さらに**需要を、**貨幣所有者の意向とは関係なしに、長期にわたって延期させることができなくなったがゆえに、一度として労働の不足が生じることはなかった。

ところで、労働は商品である。したがって、商品は貨幣と同格の存在であった。そのため、貨幣は絶えず提供されていたがゆえに、商品、つまり労働は絶えず購入者をもつことができたのである。

しかるに商品は現金と同格であったがゆえに、またすべての商品はたえず販売されたがゆえに、すべての者は労働の時間を持つことで、現金を自由にできた。—なぜなら、労働は商品であり、商品は現金であったから。—「時は金なり」ということは、ここではけっして空疎な文句ではなかったのである。

それゆえに、だれもが金詰まり状態に陥ることがなかった。そしてだれもが貨幣を流通から撤収させることに利益を持っていなかったがゆえに、つまり、だれもが直接的損失なしには貨幣を流通から撤収できなかったがゆえに、**すべての者は現金払いを行った。**

そこでは、いかなる帳簿も、支払不能も、存在しなかった。なぜなら、信用販売はなくなったからである。したがって、すべての者は、二重帳簿なしにたえず自分の財務状態についての正確な情報を知り得ることができたのであった。

今や商品と貨幣は、日々その価値を失った。だが、その事態にいかように対処しようとも、このような損失は防ぎようがなかったのである。

その唯一の予防策は、資本を再生産に使用することでしかなかった。だが、すべての者は、自己の生産手段を持ちながら絶えず完全雇用の状態にあったがゆえに、そうした目的の実現のためには、[追加的]労働者を自由に使用できなければならなかった。

[そうなった場合の]結果は、資本の大きな供給であった。なぜなら、人々は自らの損失を免れるために、資本を他人に貸与したからである。

かくして、人々は、商品を現金で販売することよりも、商品を一年後ないし一日後再び新鮮なもので返却するという条件のもとで商品を譲渡するということを選択した。なぜなら、その

交換の結果得られる現金や商品はともに、日々その価値やその重量を減少させる上に、[盗難などに] 警戒しなければならなかったからである。

かくて、資本を必要とする者には、資本があらゆる方面から提供されることになった。そこではだれも、利子などを要求しなかった。なぜなら、このような方法をとることで錆や損失から守られることの方が、利子よりもはるかに利益が大きかったからである。たとえば、100を借りた者は、100を再び返却する必要があった。それでも多数の資本家は、おそらく99ないしそれ以下でも満足したであつたろう。

だれかが家屋を焼失した時、即座にあらゆる方面から、利子なしの資本を彼に提供しようとする資本家たちがやってきた。そしてこのような方法で支援を受けた手工業者は、自分の家屋を再び建てて、労働し、稼いだ。その後、前貸しされていた資本が資本家たちに返却されたが、資本家たちは、こうした貸借関係が長く継続しないことに腹を立てた。むしろ彼らが真に望んだのは、手工業者が資本をなおいっそう長期間保持し続けているということであつた。かくして、今や再び資本は、貨幣や商品のどちらに投下したかとは関係なしに、日々資本家たちの手の中でその価値を失っていくことになったのである。

今や資本を求めるすべての者は、十分に資本を見出した。だが、こうした資本は信頼されていない人間には貸与されなかった。なぜなら、彼らがもたらす全損失は、錆などによる損失よりもはるかに大きいからであつた。それゆえ、独立的な経営を行うことができず、日雇いとなっている人々が、たえず存在していた。今や、そのような人々には独立的な経営を行うためのいかなる資本も提供されなかったが、監督を受ける労働に従事する人々への必要や需要はますます大きなものになった。通常の場合、人々はそのような労働力を確保するために走り回るのが常態であつた。なぜなら、人々は労働力からい

くばくかを稼ごうとしたからではなく、日々その価値を減じている資本を再生産に利用することで、資本を確実に保持しようとしたからである。それゆえに、労働者への大きな需要がある場合、賃金は、労働が産出した価値に到達したばかりでなしに、その上しばしばそれを上回ったのは、当然のことだつた。それにもかかわらず、こうした事態であっても、事業は利益を生んだ。なぜなら、その損失は絶えず、資本が錆などによって被る損失よりも小さかったからなのである。

人々が事態をどのように処理しようとも、また人々がどのように考えようとも、人々はこうした損失を免れることができなかった。確かに、人々は土地を購入することもできただろう。だが、だれが土地を販売したというのか。換言すれば、だれが、日々その価値を減じている商品あるいは貨幣と引き換えに1エーカーの土地を販売したというのか。また土地耕作を行う労働者を確保できないばかりか、収穫よりも多くの賃金を労働者に支払わなければならない場合、土地を購入してもどうすることもできなかったのではないだろうか。

さらに人々は、家屋を建築することもできただろう。実際、家屋の建設は大規模になされた。だが、家屋が建築されればされるほど、それだけいっそう家屋への需要は少なくなった。その結果、家賃は低落し、家賃はその維持費を賄えなくなった。それにもかかわらず、この種の資本投資は、ますますもってあらゆる投資の中で最良の投資になった。したがって、その結果としてきわめて多数の家屋が建築され、すべての者が美しく広々とした住宅を所有することになったのである。

こうした家屋建築と並ぶ優良な資本投資として、自己の生産手段の改善があつた。たとえば、手工業者は、自らの機械と道具の改善とその増加とに努めた。また農家も、自分の家畜の品種改良、森林の開墾、沼地の干拓に努めた。かくしてこのような労働がより大量に行われれば行

われるほど、それだけいっそうより良質の多数の生産物が市場に出回り、それだけいっそう島民は豊かになり、それだけいっそう貯蓄も増加した。そして貯蓄が増加すればするほど、それだけいっそう資本の供給や労働者への需要もまた大きくなったのである。

このように、資本をその損失から守るいかなる逃げ道も存在していなかったがゆえに、すべての者は、良質の商品貯蓄に可能なかぎり頑丈な形態を与えることを志向したのである。このことは、[商品に対して] 絶えず最良の品質が要求されるという結果とともに、手工業者が自分の技術の向上をはかるという結果をも、引き起こしたのであった。かくして、手工業者の競争は、その矛先が価格に向かわず、生産物の品質に向かうこととなったのである。それゆえ、すべての手工業者は、可能なかぎり安価にはではなく、可能なかぎり良質にということに努めたのであった。

いずれにしても、商品は貨幣と同格であり、貨幣も商品と同格であったがゆえに、すべての資本は、いかなる時でも流動的であったために、あらゆる事業へと広がったのである。

だが、そのことは、貨幣所有者だけが新しい事業のための流動的資金を所有し、金融家だけが新しい事業に関与できる今日とは、まったく違っていた。今やすべての商品は貨幣であるがゆえに、一袋のジャガ芋、一台の机、一軒の家屋を所有しているすべての者は、流動的資本を意のままにすることができたのである。

資本のこのような流動性は、起業意欲を大いにかきたてた。そして資本はますますその所有者自身を起業に駆り立てたし、また資本家の所有が被る損失のために、資本家はますます新しい事業を起業することで自らの蓄えに堅固な形態を与えることに駆り立てられた。その結果、こうした起業意欲は国民の全体の中に普及することになったのである。かくして、このような状況は、起業意欲がいかなる政治的事件や自然的事件によっても妨げられることがないという

結果をもたらしたのである。

今や人々は、なによりもまず、新しい事業の起業によって資本を損失から守ることを志向したがゆえに、その完成に10-20年間、否、50年間の期間を必要とするような事業にも着手することができた。かくして大陸の住民が驚くほどの巨大プロジェクト事業が着手されたのであった。その際、その事業に参加したのは、少数の個人ではなく、全住民であった。つまり、すべての者が、積極的に自分の貯蓄をそのような事業の固定資本に投資したのである。したがって、その所有者は少数の銀行家などではなく、何千人もの株主であった。

ところで、手工業者は自らの貯蓄を守るために投資によって「過剰生産という」困窮に陥ってしまった。そうした困窮から抜け出すために彼らは、本能的に協同組合に合同した。その上で彼らは、こうした方法で合同の利点を享受するために、自分たちの資本を大規模工場の建設に投資した。かくして協同組合運営のこれらの工場は、最良の機械を備えるものでもあった。またそこで労働する手工業者は、自らも株主であるがゆえに、その計画の作成に際しては彼らの意見が尊重されたのも、当然のことだった。このようにここでは、資本の利害と労働者の利害が緊密に結合していたのである。それゆえ、この工場を運営するのにいかなる法律も、いかなる強制も、いかなる刑罰も必要なかった。というのも、この工場は、その所有者独自の個人的利害に基づいて運営されていたからである。

このような、いかなる恐慌によっても攪乱されることのない労働過程の下では—このような目的意識的かつ完全に均質的な営業過程の下では—、[手工業者にとって] 有益な結果が生じたとしても、だれも驚かなかったことだろう。

[このバラタリア島では] すべての住民は労働しており、また労働しなければならなかった。なぜなら、レントと利子は存在していなかったからである。他方、失業によって資本が失われるということもなかった。かくして商品交換は

単純になり、迅速になったので、もはや商人を必要としなくなったのである。今日商業によって営業員、店舗、取引所、銀行、広告、セールス旅行、ショーウィンドー、金庫などの形態で消費されていた資本は、すべて生産的投資に向けられ、全体的富裕に強力に貢献するものとなったのである。そればかりでなしに、流通において使用される貨幣の、費用のかからない代替物による簡素な税徴収方法は、すべての租税官吏を余計な存在にし、他の場合には生じるであろう出費は、有益な目的に向けることができたのである。今やすべての者は、例外なしに労働し、生産した。それとともに、全般的にみれば、より多くのものを生産すればするほど、個々人の労働はその交換価値をそれだけいっそう多く獲得することになったのである。

今や、すべての商品は生産場所から即座に消費場所に移行したがゆえに、毎日生産される以上の商品が販売されることもなくなった。それゆえに、投機もなければ、他人の費用によって暮らす者もいなくなった。投機がなくなったのは、いかなる**投機対象も存在しなくなった**という単純な理由からであった。つまり、投機をしようとするあらゆる試みは、需要が投機目的の購入によって増大するかぎり、商品の価格は即座に騰貴してしまうという事情のために、永久に座礁したのである。その際に、注意すべきことは、資本に特別高い流動性がある場合、他の人々との競争を即座に引き起こすためにも、ひとつの商品の価格が平均的生産費を僅かに越えている必要があるということである。

したがって、投機がひとつの商品を独占しようとするならば、それと同じ比率で、価格の引下げと投機家の絶滅を引き起こす競争が激化することになった。なお所見すべきは、以下のことである。すなわち投機目的のために自由になる一定の資本は、それが商品に投資されようともまた貨幣に投資されようとも、日々その価値を減じていったがゆえに、一運送費、火災保険、在庫費などの、投機のために市場から回収され

た場合の商品の経費を含む—このような確実な損失は、不確実な儲けよりもはるかに大きくなったので、それはあらゆる投機渴望を胚芽のうちに窒息死させるものになったのである。

事態はこのようにして進み、あらゆる交通制度において投機家が確固たる地歩を占めることのできる場所はなくなった。かくしてこうした状況は、とくに交通と営業状態に確固たる基礎を与え、価格を不変に維持し続けるということに寄与するものとなったのである。

〔今や〕商品は貨幣と同格になったがゆえに、だれも、自分の商品の購買者を恩人とは見さなくなった。つまり、購買者と販売者は、完全に同権の商品所有者になったのである。しかも両者は、取引の成立に同一の利害をもっていた。その結果は、各人のもっとも完全な経済的独立性、すなわちアナーキストたちが夢見た以上の完全な経済的独立性であった。かくしてだれもが、自らの見解を率直にかつ自由に表明することを恐れなくなった。そして選挙に際しては、それゆえ、だれもが自分がだれに投票したのかを秘密にする必要がなくなった。今や、秘密選挙という下品な制度は、国民の現実の心情を知るのにもはや不必要なものになった。富裕の増加、労働の生産性の上昇、営業感覚の促進がなされているにもかかわらず、この大地の宝物を問題にせず、無意味にあくせくと一日労働することよりも好んで自らの必要を制限する一定の人々が存在していた。このような人々は富裕ではなかった。なぜなら、労働なしにはいかなる富裕も存在しなかったからである。だが、彼らは僅かな労働を行うことで、絶えずいかなる時にも自らの僅かな欲求を充足させるのに十分であった。

他方、吝嗇、物欲の人、そしてあくせく働く人も、他人にとって現実的な危険にはなりえなくなった。なぜなら、彼らがどのように労働し、吝嗇になろうとも、また節約しようとも、**彼らが自らの資産に付け加えることのできるものは、たえず自己の活動の所産でしかなかったからで**

ある。利子も、未払いの賃金も、商人の利潤も、投機利潤も、自らの富の蓄積を助けるものにはならなかった。そしてこのような富は、その所有者に権力を与えるのに十分な大きさになるはるか前に分配されるので、すべてのアナーキストの中でもっとも強力な人々を死滅させるに至った。[われわれは、彼らの墓の前で言いたい。]「安らかに眠りたまえ」と。

私は、今や—私がバラタリア島の住民の文化的発展を描いたような—そのような経済的諸関係の基礎に立つべきかどうかという問題を読者に任せる。私にとって問題なのは、**経済的諸関係がいかに必然的に発展しなければならないのか**ということを描くことであり、金の代わりに**われわれ自身とわれわれの生産物よりも少しも良くないひとつの交換手段**、すなわちその他のあらゆる商品と同様に錆びていく交換手段を導入することでしかなかったからなのである。

第二十二章 カラリア [島]

バラタリア島の経済関係と今日の経済関係との相違は、読者の注目するところとなるだろう。

商人のいない国、店舗のない都市は、いずれにしても全く斬新なものである。

商品が固定的な価格を有する国、いかなる投機も商業を攪乱することのない国、いかなる破産も刑の執行も生まれない国、こうした国は少なくとも読者の関心と呼ぶところとなるだろう。

現金払いが実施され、仕立て屋が自分の顧客の前で帽子をとらず、借りた資本に対していかなる利子も要求されない国、こうした国は彼にはまったくありえないように見えるだろう。経済恐慌のない国、すべての者が満杯にした貯蔵室を所有する国、すべての者が消費者からの直接の注文にだけ応じて労働している国、いついかなる状況でも失業が支配することのない国、こうした国は読者の圧倒的賛成を得られるだろう。

国家が重税を徴収しない国、国家があらゆる

歳出のための秘密の歳入源泉を持っている国、こうした国は読者にとってまったく謎にみちた存在であるだろう。

労働者が賃金として自らの労働の全価値を手に入れる国、商品が現金と同格である国、労働者自らが株主である国、すべての者がもっとも完全な経済的独立性を有している国、そして金の代わりにまったく地味な対象物が商品交換を媒介する国、こうした国は読者には社会主義的ユートピアとして見えるにちがいない。

けれども、読者が偏見なしに注意深くこの事態を読み解くならば、彼は、これらすべてのことが**唯一の原因**の直接的作用にすぎないということ、そして交換手段としてわれわれ自身やわれわれの生産物よりも良くもなければ悪くもないひとつの対象物—**われわれ自身**と同様に再び消滅していくような対象物—が導入されるならば、交通が**必然的に**発展するにちがいないということに、同意するにちがいない。

ところで、われわれが矛先を逆に向け、ヨーゼフ・ハイエン氏が島民に、**檜の実の価値を重量にしたがってではなく、数にしたがって計測**することを提案したと仮定しよう。その結果、同じ檜の実、一貨幣がその重量を減少させるか否かに関わりなしに—**絶えず名目的に同じ価値を保つこと**になるだろう。

このような方法をとるならば、貨幣の維持費は、もはや貨幣所有者の負担にはならず、国家の負担になる。今日、金属鑄貨の損耗が国家の負担になるのと同じようにである。

かくして貨幣は、古いか新しいかに関わりなく、また損耗したか否かに関わりなく、たえず同じ価値をもつ。そして貨幣の重量といったことは、もはや不必要なものになる。

このような利点は注目には値いするものであり、無下には否定できない。だが、われわれは、このような小さな利点は何百万倍もの欠点によって廃棄されるということをも見る必要がある。第一に、国家はこれまで行政費を捻出してきた収入源を失う。そしてその代わりに、国家は複

雑かつ厄介な、経費のかかる租税徴収方法を導入しなければならなくなってしまう。

通常の歳出のための租税を徴収しなければならないばかりではない。租税徴収の費用額—このような租税徴収によって民間人の側に課されるあらゆる出費を計算するならば、その費用額はドイツの状況では租税額の10%以上の費用額になってしまう—をも引き上げなければならない。だれかが自分の租税を支払うならば、彼が租税当局に支払う貨幣ばかりか、彼が支払いなどに際して失う時間や関係者が租税徴収行政のために失う損失もまた、問題になるのである。

そればかりか、その他の点でも、事態は大きく変わる。

「そうなった場合」すべての者は考える。「これから導入しようとする貨幣、これは以前の貨幣よりもはるかにより良い貨幣である。それは以前のようにには腐らない。たとえそれが腐ったとしても、その損失は私の勘定にはならない。貯蓄を錆から守るための素敵な貨幣、それは優れた制度である」、と。

貨幣は、すべての者によって堅持される。それでも、貯蔵室を設置するというのか。

「このような古代の制度などさっさと消え失せろ。私は、商品を損害から守ることで満足する。そしてこの労働を、私は好んで他人に任す。私は、一台の車にこの貯蔵物を満載して市場に行く。私は貨幣を所有したい。一番いいのは、新しく頑丈な貨幣なのだ」、と。

けれども残念なことに、彼は、抜け目なく行動しようと考えているただ一人の者ではない。この島のすべての住民は、同じ考えをもっている。商品はあらゆる方面から流入してくる。恐るべき数の群衆が街頭を支配し、車や人間が溢れ、すべての売りに出された商品は値引きされても、だれも購入しようとししない。

ここでは貯蓄を貨幣形態で保全し、貯蓄を錆から守りたいという自然的願望がいかにわれわれが今日観察している巨大な商品供給を作り出しているのかということが分かるだろう。

「お前はユダヤ人のくせに、私の馬を待たすのか」と、シュティエンは、購買者が現れるまで長く待たなければならないことに怒りをもって叫ぶ。「私はすでに述べたように、あなたの馬を30ターラーでしか買わないつもりだ。」「このユダヤ人野郎、くたばってしまえ。」

自分の色とりどりの織物をいつものように即座に販売できない他の者は、机の上のにり、大声で自分の商品の良さを吹聴し始める。彼は値段を次々に引き下げるけれども、だれも彼の織物を買おうとしない。すべての者は販売だけをしたいのであって、だれも買おうとは考えていないからである。

ここでは、商品を貨幣に代えたいという全般的願望がいかに商品交換を困難にしているのかということが分かるだろう。

泥と雪に膝までつかりながら、良き島民はそこを動かず、馬鹿なガチョウのようにあたりを見続ける。遅くなり、冷たい雨が降りしきり、ひもじく、悪態をつきながら新しい貨幣を求め続ける島民は、自らの商品を再び荷造りし、貨幣を手に入れることなくまたや家路につく。けれども、若干の農民は、「赤い鼻」という飲み屋に立ち寄り、強い酒を飲むことで自らの怒りを宥める。彼らの中に、高慢なヒルシュゾンと取引をしているわが友ハイエン氏もいる。

「とんまめ」と言い、彼は、そこで彼が所有する唯一の現金を支出した。彼は、額面の大きな商品を持っている。彼は考える。「商品は貨幣と同格であるのに」、と。彼もまた、国家が今や以前の収入源を自ら塞いで以来、国家が徴収する租税のことを考えない。

ハイエン氏はそれほど多くを飲まない。現金を持たないで飲むならば、ますます困った事態になるからである。

この最初の日の最終的結果は、10000人の農民と手工業者が就業日を終日市場で過ごし、島民の国民的資産は10000労働日の生産物だけ貧しくなった。つまり、一人5マルク、したがって50000マルク貧しくなったということであっ

た。

翌日も同じ光景が繰り返され、再び良き島民は、柱のように自らの商品の前で動かず、再び商品は販売されないままであった。したがって、再びハイエン氏は、飲み屋に立ち寄って酒を飲み、今日自らの立派な馬と引き換えに20ターラーしか出そうとはしなかったヒルシュゾンを罵った。

「それに対し、だれかが言う。」

「農民よ、お前は尊重されていない。お前は新しい、傷むことのない、優れた貨幣の秘密の蝶番いの上にしっかりと座っているのに。しかるに、明日お前は税を支払わなければならない。だが、[お前は] 現金をまったく持っていない。お前の穀倉庫は満杯であり、お前の耕地はよく耕作され、お前の馬はよく肥えている。だが、お前にはもっとも大事なものの、現金が欠けている。」

再び10000人の男が一日就業できず、再び市場に何も出さないならば、島民は50000マルク貧しくなるだろう。

次の日にも同じ事態が生じる。したがって、農民は不確実性の感情から以前よりも早起きするだろう。なぜなら、すべての者は、市場にだれよりも早く先駆け、自分の商品を販売できる最大の機会を掴もうとするからである。

わが友ハイエンの場合にはどのようなことが生じるのだろうか。彼は、3時間も早く、駆け足で都市の市場に駄馬をもって急ぐ。「火災が生じないか。子供が病気になるか。子供を急いで医者ところに運ぶ必要がないのか」と、考えながら。

「おー、否」、今日彼は税金を支払わなければならない。したがって、彼は今日いかなることがあっても彼の駄馬を販売しなければならない。なぜなら、だれにも、彼が支払いの遅れた者であると言わせたくないからである。それゆえ、彼は急ぐ。それゆえ、彼は農民の車の長い列にまじって急ぐ。彼は、市場に登場する最初の人でありたい。彼の唯一の心配は、ヒルシュゾン

がそこにいるかどうかである。彼が考えるのは、馬商人の世界がどうなっているかだけである。つまり、彼が考えるのは、ヒルシュゾンは、病気になるっていないのか、また天気は良くないのかといったことだけでしかない。

彼が市場に現れた時には、まだ暗かった。そしてハイエンは、苛々しながら朝焼けを待った。だが、その間にヒルシュゾンはベッドに横たわり、ゆうゆうと眠りについていて。彼は急ぐ必要はなかった。彼は、現金を所有していることが、決定的な切り札になるということを良く知っていたからである。

わが農民は長いこと待たなければならなかった。それとともに彼の困惑した表情が明るさとともに浮かび上がった。最終的に彼は、群衆の中にあのユダヤ人を発見した。そして彼は神に感謝した。ヒルシュゾンは健康であり、病気ではなかった。「神は私を捨て賜わなかった」と。

「おはよう、ヒルシュゾン氏」と彼は叫び、帽子をとった。「ここに私がいる、ヒルシュゾン氏よ。貴方は、私の馬を見たくないか」と。「あー」、まったく「ハイエンとは」異なった調子で答える商人は、考える。「販売は急がねばならないのだ」と。

動物に触れ、歯を調べた商人は言う。「この馬はすでに5歳馬である。よく飼育されているけれども、ひづめの釘は無くなっている」と。

「したがって、私は、私の以前の購買価格を撤回する。私はその馬と引き換えに15ターラーを与える。」

農民はこれにびっくり仰天する。彼は20ターラーと決めていた。今や彼は15ターラーしか手に入らない。けれども、彼にはどうすることもできない。彼は税金を支払わなければならないし、税務当局もまた馬での支払いを受けとらない。そこで通用するのは「現金」だけである。

「高利貸しよ、馬を引き取れ」と、ハイエンは言う。多くの人は、首をかしげながらこの奇妙な取引を見つめている。

人々は、ここに今日の商品と貨幣の間にある

大きな相違を認める。その結果人々は、商品所有者ないし生産者がどれほど貨幣所有者に隷属しているのかを見るのである。つまり、貨幣所有者がこうした生産者の隷属からいかに資本を引き出すのかを、人々は見るのである。だが、それと同時に人々は、今日すべての者がどれほど彼の財務状態に注意を払わなければならないのかを、またすべての小さな怠慢がいかに高利貸しによる搾取の原因になっているのかを見るのである。

「貨幣が少なくなると、価格は下落する」と、島民は言った。

けれども、以前から同一量の貨幣が存在しているばかりか、貨幣は1ペニヒも減少していない。そこには、たったひとつの相違だけが存在しているにすぎない。以前には貨幣はその所有者の費用で錆びていたけれども、今や国家の費用で錆びている。したがって、すべての者は、貨幣を堅持する。またすべての者は、商品が錆びて被る損失を他者に転嫁しようとする。それゆえ、すべての者は、彼の節約を頑丈な貨幣形態で保持しようとする。

大きな供給、小さな需要、価格の下落。

だが、価格が下落した場合にも、商品は取引されない。すべての者は、必要なものしか購入しない。一袋の代わりに一片しか購入しない。一樽の代わりに1リッターしか買わない。残りは、販売者によって繰り返し荷造りされなければならない。

今や、商品を販売するには言語に絶した努力をしなければならない。それにもかかわらず、新しい卓越した頑丈な貨幣制度が島民の間に引き起こしている損失は、すでに莫大なものになっているのである。

しかるに、なにゆえ商品は、日々市場に持ち込まれ、夕方には再び家に持ち帰られねばならないのか。いずれにしても、景気の動向が改善されるまで商品を在庫できる小屋や頑丈な家屋が建設される。このような家屋の建設と維持には、莫大な資本がかかる。したがって、だれか

がこの資本を支払わなければならない。

また商店街が建設され、ショーウィンドーに商品が展示される。そしてそれらを維持するための人々が必要とされる。だが、だれがこのような人々への支払いを行うのか。

したがって、商人はすべての販売される商品から10分の1税とも呼ぶべきものを要求する。だが、だれも商人に従わない。購買者は横柄にも貨幣の権力を誇示し、このような要求を拒絶する。こうした困難は、商人の社交的態度や策略によって克服されねばならない。というのも、商人個々人は、社交的才能をとりわけ多く有しているからである。彼らは、他の人々よりもはるかに多くのものを販売する。その結果として、彼らのところに10分の1税がもたらされるのである。彼らは節約することができるし、またこの節約に頑丈な貨幣形態を与えることもできる。これまで彼らが生産者の計算で販売していた商品を、彼らは今や自分の計算で買い取り、支払い、しかも現金払いをする。かくして彼らは、生産者から超過利潤、すなわち彼らが割り引き、値引きなどと呼ぶ超過利潤—彼らが商品に投下する資本の報酬としての超過利潤—を要求するのである。

以前には長いこと生産者の貯蔵室に在庫され、私的自己消費に向けられていた商品、それは今や、以前には介在しなかった商人の所有になっている。

このような所有の変換はどうして生じたのか。

商人は言う。「このような商品はわれわれの労働の報酬である。そしてだれもがそのことを否定できない。なぜなら、商人は実際多くの労働を行っているからである」、と。

多数の商人がいる。商品を小売りするために、多くの人手が必要になる。それ以外にも、取引は絶えず緩慢にしか進まず、購買者は絶えず横柄で、商品にたえずけちをつけ、できうかぎり安価に購入しようとする。

したがって、取引と値引きには終りが無い。商人のこうした時間の損失をいっただれが最

最終的に支払うのか。

自己消費する商品のために保持されている島民の貯蔵室は、今や空である。そこにあった、貯蔵費用のかからなかった商品は、今や、商人のところにあり、商人は小売りと引き換えにその10%、15%、20%の商業費を徴収するのである。

人々は、ここに一人々が商品それ自体よりもより良い対象物を貨幣として導入したかぎりでの一商業が取らなければならない自然的発展を見るのである。

だが、貯蔵室が空になるのに対応して、仕事場は自己の工業製品で一杯になる。自己の必需品の貯蔵に代わって、今や靴屋にとって彼の仕事場は靴で一杯になっているけれども、だれも靴を望まない。販売を促進するために、彼は、彼の家族がこれまで住んでいた、通りに面した美しく健康な部屋を明け渡し、彼の奥さんと子供を湿っぽい奥の部屋に閉じ込め、通りに面した部屋に鎧戸を備え、靴やスリッパで一杯にする。

以前には人々は、薔薇の花の間から窓越しに靴屋の赤い頬の子供を見た。そして都市の外観は、靴屋のこうした引っ越しによっても何も変わらない。奥の部屋の湿っぽい空気の中からは赤い頬もまもなく消え去る。

以前には靴屋は注文生産にしたがって労働していたが、今やストックのために労働している。彼は、必要があるのか否かを知らない。彼が靴を販売できるのかどうかは偶然のままである。

彼は、適度に働けない。すべての手工業者はそうである。過剰生産という言葉が聞こえてくると、手工業者の労働は過少になり—そして非自立的労働者の場合には働き口を求める失業者の増加などとともに—、日々巨額の金が失われていく。

夏になれば、野原は一面見事な草原になる。

この草原の大司祭のヒバリが自然の祭壇でミサを行うために大空に飛び立つ。深い祝福の中で草は大地に茂り、彼らの牧師の祈りに聞き耳

を立てる。そしてこうした歓喜の中で近くの小川が好ましいメロディーを奏でる。「ハレルヤ、ハレルヤ」と。

ヨーゼフ・ハイエンは、ヒバリの囀りを聞き、彼の心は、彼の労働を豊かにしてくれる創造主への感謝に溢れる。彼の感謝はこの大地のほこりとなって舞い上がり、あらゆる山の上をさ迷いながら、遠方の青い靄の中に消えていく。

彼は、穀物の穂から打穀するような貨幣はもとより、暗闇の中で網を引いて待っている投機のことなどを考えもしない。

けれども、藪の中を這うのはいったい何か。草むらの中を音もなしに忍び寄り、空に飛ぶ鳥に鋭い眼光を向けている動物、それはいったい何か。

ヒルシュゾンはいったい都市で何をやらしているのか。彼は、愚かな人のように倉庫から倉庫に行き、荷造りの紐—農民が自らの刈取機のために束を結び付けるのに必要となる荷造りの紐—をすべて購入する。彼は是が非でも全ストックを購入し、明日にでも仕事を始めるつもりである。

鳥の物哀しげな泣き声は、ハイエンを夢から覚醒させた。そして彼が覚醒した目で事態を眺めるや、彼は藪の中にヒバリとともに爬虫類が消え去ったことに気付いた。彼は、怒りをもって立ち上がり、荷造りの紐を購入するために都市に出かけた。ヒバリが自らの囀り欲求に命をもって償わなければならなかったことに、彼は苛立った。「とんまめ」と。

ハイエンは、以前には予め自らの貯蔵室に荷造りの紐を備えていたが、今や卓越した、頑丈な貨幣の導入以来、彼は好んで保持の用意を商人に任せきっていた。

彼は、1 ツェントナーの荷造りの紐を商人に求める。彼のポケットには現金がある。

哀しいかな、荷造りの紐はまったくないというのが、その答えである。「どうして貴方は荷造りの紐をまったく持っていないのか」と。

第二の商人のもとでも同じ答えである。「私

はどこでその荷造りの紐を手に入れることができるのか」と愚かなハイエンは怒りをもって尋ねる。「ヒルシュゾンのところでだ」と。

すでにハイエンは、遠方から激しい叫び声を聞いていた。多数の農民は、ヒルシュゾンの家の戸の前にいて、「詐欺師、高利貸し」などと叫んでいる。いったい全体何が起こったのか。

「ある者が言う。」

「1キロの荷造りの紐のために、われわれは10マルクを支払うことになっているが、これまで荷造りの紐と同額であった商品は今でも50ペニヒである。したがって、これは前代未聞の搾取にほかならない」と。

ヒルシュゾンは、そうこうしている間に、静かに自分の荷造りの紐の上に座り、農民の自然な怒りを嘲笑しながら、「荷造りの紐はすべて俺が付けた価格でしか売らない」と述べた。その発言が意味するのは、農民がヒルシュゾンの要求する価格を支払うのか、あるいは穀物を茎ごと腐らせてしまうのかである。なぜなら、荷造りの紐なしには、機械は作動しないからである。

ヒルシュゾンは、ここで一挙に10万マルクを儲けた。他方、ハイエンは次のように漏らした。「ヒバリは自らの罫りによって1000マルクをふいにした」と。

人々は、ここに、大小の程度の相違はあれ日常的に行われているようなむき出しの投機を見る。だが、それは、貯蓄を商品形態の代わりに貨幣形態に固定するという悪習にのみ基礎をもつものにすぎない。そのため、投機家は、一定の商品種類のストックについての正確な見通しを手に入れ、このストックの突然の購入によって消費者を困難な状態に陥らせることを可能にする。人々は、また、こうした投機の衝動がいかにすべての者をして物質的利害への間断のない注意を向けることを強いるのかをも見る。なぜなら、だれも、投機の網の前では確実な存在になれないからである。このことをしない者は破産し、乞食となって街頭にほうり出されるだ

ろう。今日人間が自らの物質的利害に対する感覚を持ち過ぎているというこの特有な現象についての自然的説明が、ここにある。つまり、すべての者は、今日の営業状態における不確実性によって専ら自らの財務状態に関係することを余儀なくされているのである。

ヒルシュゾンは、今や資本を、しかも錆びない資本を所有する。そして彼はその資本を扱う術を心得ている。たとえば、彼は銀行を設立する。すでに長いことそのような制度への必要が存在していた。なぜなら、信用制度は、絶対に必要な制度と見なされていたからである。

手工業者は彼の家を靴で一杯にするけれども、貨幣を持たず、自らの私的消費ストックをほとんど持っていない。したがって、彼は信用でそれらを購入する。

信用販売する商人は、現金買いができないために、信用を要求する。

ヒルシュゾンは銀行を開設しなかったならば、彼はあらゆるところから信用を求められただろう。そして、ヒルシュゾンは、6%の割引きを計上して、手形を振り出したことだろう。

ヒルシュゾンは、有能な商人との評判であり、彼の商人道徳は疑問の余地のないものである。したがって、人々は彼に全面的な信用をおき、島民は躊躇することなしに自らの貯蓄を彼のところに持っていく。彼はそのような貯金に4%の利子を支払う。彼は、その差額2%を手数料として徴収する。

人々は、ここに頑丈な、素晴らしい貨幣がいかに商品交換を緩慢にさせ、それゆえに信用制度を引き起こすのかを、かくして銀行を必要とするのかを見るのである。

だが、商人が銀行家に支払わなければならない6%の利子を、商人は自分の財布からは支払わない。この利子は、全般的費用として商品価格に加えられる。それになお4%の超過利潤が加えられる。なぜなら、商人は善意で交換を媒介するのではないからである。

人々は、ここで銀行家への預金にどうして

4%の利子が付くのか、だが、他方ではどうして商品価格の8%が商人に返却されるのを見ないのである。

だが、島民はこのことを見ない。銀行家が支払う利子に彼らは魅了される。すべての余った小金は銀行に持ち込まれるが、人々が信用買ひするようになると、それだけいっそう多くの貨幣が銀行に持ち込まれるようになる。そしてこの悪習が広がれば広がるほど、それだけいっそう生産者は困窮状態に陥り、それだけいっそう商品は不稼働的になり、それだけいっそう信用が要求されるようになり、それだけいっそう多くの手形を、銀行家は自らのポートフォリオの中にもつことになる。かくしてすべての商品交換は、信用に基礎をもつことになる。それは、債権者と債務者の無限の連鎖を意味する。一方は他方に依存するというようにである。「なんてこった」。四肢〔の一部〕が引きちぎられれば、この唯一の四肢〔の一部〕の破損は、不可避免的にその全連鎖の破損になってしまう。

今や銀行家の手によってあらゆる四肢が繋がっている。したがって、彼の手に全交通の糸が集中し、銀行が全商品交換を管理しているといつてよい。

預金は長期間解約することができない。だが、商人の手形は、大部分一定の期日に満期になる。ヒルシュゾンは、そのことを心得ているので、彼は大きな略奪行を計画する。

信用へのあらゆる新しい要求を、彼は次のような口実によって拒否する。「来年バツが収穫を破壊するだろう」、と。彼は、より多くの貨幣を流通から撤収させるために預金の利子率を6%に引き上げる。彼はすべての未回収金を容赦なく取り立て、まもなくすべての貨幣を銀行に集め始める。

商品交換は、完全に中断される。需要は減少し、価格は下落する。商人は、未回収金を取り立てることができない。貨幣は入手できず、支払期日は日々近付いてくる。恐るべき恐慌が支配し、だれもその原因を除去できない。

債権者は、自らの債務者に支払いを強要し、他方では自らの債権者に支払いを強要され、脅される。租税の強制徴収が行われ、ダンピング価格で農民の全財産は競売にかけられる。

商人は、脅威に晒されている自らの名誉を救うために、最後の避難所に逃げ込み、大々的な競売を行う。そして**唯一の購買者は、ヒルシュゾンの代理人だけである**。なぜなら、ヒルシュゾンは、同等の商品、すなわち等価物である現金を意のままにできる唯一の人であるからにほかならない。

だれもヒルシュゾンを非難しない。反対に彼は、高い尊敬を受ける。なぜなら、手形を拒絶するかわりに、彼は手形に利子を付けることでその期日を延長させるからである。

ヒルシュゾンは、今や突如利子率を2%に引き下げる。したがって、預金は銀行から逃げる。信用供与においてヒルシュゾンは、きわめてリベラルである。あらゆる信用要求は承認され、銀行の金庫は空になる。

その結果、きわめて多くの貨幣が流通する。貨幣は驚異的な速度で流通し、需要は増加し、あらゆる商品の価格は騰貴する。同等の商品、すなわち等価物である貨幣はもはやほとんど価値をもたなくなる。そして**ヒルシュゾンは、今や恐慌の期間中に自分が買った商品を販売する**。

彼は、投資した貨幣額の2倍の額を手に入れ、百万マルクを稼いだ。

人々は、一商人が諸国民の間で占める地位や証券が商品に占める地位はもとより、略奪物が百万マルクではなく、何百万マルクになるかどうかなどについては多少の相違があるにしても一、ここに投機というものの実相を見る。民間人が自らの過剰な資金を銀行に預ける結果、銀行家は、すべての流動資金を意のままにし、有価証券相場を引き上げたり引き下げたりできるという恐るべき権力を掌握し、純利益としてその差額を手に入れる。そのような略奪行の後にはいつも破産した商人と工業家の多数の死体があるがっている。そのことに対して銀行家はま

まったく無頓着なままである。このようにして国民は、預金というシステムとともに銀行家自分自身の預金者を捕捉し、略奪するための網を編むための糸を、自ら提供しているのである。

ヒルシュゾンを今や司令官と仰いでいる島民のもとでは、状況は一変した。

商業は、停滞的で、不規則的な貨幣流通によってますます困難なものになる。価格は上下し、同等の商品、すなわち等価物は日々その購買力を変化させ、もはや価格は固定的にならない。その結果、商業は特別な用心を必要とするものになる。平凡な人物は手伝い報酬を得られるだけでしかない。それに対し、事業の指導者自身は、銀行家の策略を成功裡に阻止できる、天分豊かな、用心深い人物でなければならない。かくして商業は有能な人物を必要とし、無能な人物は淘汰される。したがって、科学と工業にとっては能無しと変人しか残らない。

手工業者は、労働者以上に商人的でなければならない。彼は、自らの商品の価格変動についての正確な情報を得なければならない。したがって、原材料の市況は自らの経験を積むための講義の場となる。このような価格変動に十分な注意を払わない手工業者は、全般的には技術的に有能であってもプロレタリアに転落してしまう。

農民は、自らの生産物中の大きな部分を商業費に奪われてしまう。つまり、彼らが以前行っていた貯蓄は、商業と投機とによって商人と銀行家の財布に入ってしまう。

彼らは税金を支払うことができないばかりか、道路、鉄道建設のためのいかなる流動資本 *ein fluessiges kapital* ももはや持っていない。したがって、彼らは労働を二倍にすることによって貯蓄しようとするけれども、こうした生産の増加は価格の下落だけを引き起こし、貨幣所有者を有利にしてしまうという結果になる。

「われわれには鉄道が不足している」と、農民は叫ぶ。そして鉄道建設が決議される。だが、流動資本を意のままにできる唯一の者は、商人

と銀行家だけである。農民は積極的に参加したいけれども、流動資本をもっていない。彼らはいかに資本を貨幣化するのか。だが、彼らの資本は貨幣ではない。そればかりでなしに、こうした供給の増加は、価格下落だけを引き起こす。かくして農民は、株式登記を行う時に排除されてしまうのである。

人々が今日鉄道を建設するのは、それが収益をもたらすことへの期待、つまり運賃（率）が収益をもたらすことへの期待からである。以前に国道が建設された時、このことは住民の利便性という観点から共同体の費用でなされ、だれもレントなどを考えなかった。だが、鉄道は国道とはまったく違う。人々は鉄道に利子、レント、配当金を要求する。それらの要求が充されないならば建設されない。したがって、今や島民は、商業費の中に鉄道配当金をも加えて支払わねばならない。その際、運賃（率）は、農民の大きな負担となるように設定される。かくして彼らの担税力は減少する。つまり、国家が遂行しなければならない唯一の大きなプロジェクトのための資金すらも、税によって完全に徴収されることがないのである。その結果、国家は、国債に頼ることとなる。ここでも、国家に流動資本を提供できる唯一の者は、またもや商人と銀行家だけでしかない。したがって、国家はこのような国債の利子を支払わなければならない。そしてこの利子額は次年度以降の予算に組み込まれていく。つまり、レントナーは、国庫に資金吸入器を備え付けるのである。そのために国庫は、急速に救いがたいほど衰弱していく。かくして国家は、毎年新しい国債をもって貨幣市場に登場し、毎年生産者の担税力を衰弱させていくばかりでなしに、それに比例して利子と複利の金額を増加させるとともに、その返済額を税金によって徴収しなければならないのである。

多数の農民は、今や自らの支出を抑えなければならない。彼らは、贅沢をするといった軽率な真似はできない。彼らは、自らの借金と高利貸しとを伴って村に帰ってくる。また徴税人の

機構が必要になり、彼らの給与は次年度以降の予算に組み込まれる。他方、裁判所による競売が行われる。だが、公証人と裁判員もかすみだけでは生きられない。多くの農民は、税の滞納のための強制執行という不名誉を回避するために、抵当権に逃げ込む。こうして抵当機構といったものが、レントナー、商人そして銀行家たちによって設立される。そしてこの怪物が設立されたところでは、ペンペン草ももはや生えない。かくして農業プロレタリアが今や形成される。以前には自らの太った豚を食べていたヨーゼフ・ハイエンは、今やこの豚を都市に運ぶことになる。そこでは、レントナーが絶えず良い買い手になる。ヨーゼフ・ハイエンは、このような変化を次のように説明しようとする。「気候が悪くなっている。したがって、土地はもはやこれまでと同じ収穫をもたらさない」、と。だが、彼は、頑丈な、素晴らしい貨幣がその原因になっているとは考えもしないのである。

彼は、自分の農場とともに大きな沼地を持ち、以前にはそこを乾燥させるために絶えず働いた。そして彼の二人の息子も結婚し、そこに定住した。

だが、今や彼は、沼地の乾燥化を行わない。なぜなら、彼は、即座に利子をもたらない労働のために時間をさくことができないからなのである。したがって、沼地は以前と同様手付かずのままになっている。

人々は、ここに、頑丈な、素晴らしい貨幣がこの貨幣の特権を利用できる少数の抜け目のない人々を有利にしていることの原因、この頑丈な、素晴らしい貨幣が生産者を破滅させていることの原因、そして農業住民の衰退が休閑地と荒野の開墾を放置していることの原因などを見るのである。

自分の働く農地をもたないハイエンの息子は、都市に移住する。そこで彼は、ヒルシュゾンの召使として調理場で豚肉の骨—彼の父親が抵当利子の支払いのために市場に持ち込んだ豚—を齧ることになる。

彼と同様に多くの国民が農村から都市へと吸引される。ほとんどの者は必要に迫られたからである。つまり、その多くの者は、ここで展開されたような光輝く貨幣によって吸引されたのである。なぜなら、農村が今や都市に対して商業費、抵当、国債そして家賃、投機利得、鉄道配当金などの形態で支払わねばならない貢納は、レントナーがあらゆる種類の贅沢三昧をすることを許すとともに、農村では農民が小さな農園の耕作すら放棄しなければならない事態に陥らせたからであった。かくして農民は、以前には花壇があった戸口の前に温室を建て、時間を節約するようになった。

農民が貨幣をもっていれば、怖い物なしの状態であるだろう。だが、農民が貧困になるのに比例して、農民の購買力は減少し、全産業部門全体が麻痺する。また独立自営の手工業者の多くも農村から殺到するプロレタリア大衆に投げ込まれる。他方、労働は十分に存在している。とりわけレントナーのための贅沢品を生産しているあらゆる仕事場は活発に活動している。しかも、これらの産業はとりわけ手工業部門を必要としている。これをどこから持ってくるのか。その時、ヒルシュゾンが、再び救世主として登場する。すでに彼は何度も困難な状態から都市を救った。したがって、人々は彼の太った腹に褒美を出した。都市は、彼の銀行制度、街路、鉄道に感謝し、彼の報酬を認めつつ、彼を名誉市民に任命した。

ヒルシュゾンは、レンガ造りの、最新の機械を装備した大きな紐製造工場を設立した。何千人もの人々がそこに雇用され、すべての者は、この偉大な慈善家に恭しく挨拶した。

だが、このような慈善はすべての者に等しく受け入れられたわけではなかった。なぜなら、ヒルシュゾンは、彼の工場労働者に賃金として最低限の生活費しか支払わなかったからである。また小さな手工業者も、自らの必要を充足させるためには、以前よりもよりあくせくと働かなければならなくなったからでもある。

人々が隣人に示す慈善は、天上界のものではない。つまり、工場はこの種の慈善でしかなかった。事実、ヒルシュゾンは、この工場から金を儲けたのである。

犬が獲物を嗅ぎ付けるよりも早く、商人は貨幣を嗅ぎ付ける。したがって、ヒルシュゾンが労働者から金を稼いでいるということは長いこと秘密にはできなかった。ましてや、競争相手の企業もこの地上に誕生した。

支配をめぐる争いの中で、小さな独立自営の親方は圧迫された。かくして失業者の人数は増加し、賃金は下落した。飢え、貧困、革命だ。

「地上は過剰人口になっている」と、大学教授は叫ぶ。そして大衆は「その通りだ」という。「否、労働者は節約の大事さを忘れている。彼らは余りにも文句が多すぎる」と。他の者が「地上は、自らの住民をより良く扶養する状態にはない」と言う。多数の人々も「その通りだ」と言う。

「諸君は、われわれの存在の目的がこの世ではアダムによって犯された原罪を贖罪することにあることを忘れている。労働は誤って主張されているように人間を重視するのではなく、神が犯罪者に課す刑罰なのである」と。手短に言えば、「地上は監獄である」と坊主が厳かに言う。多数の者が「その通りだ」という。

「何と」。他の者が言う。「この貧困の原因はどこにあるのか」と。「労働者が余りに賢い点にある。したがって、われわれは学校を廃止しなければならない」と。

「否、反対である。労働者は十分な教育を受けておらず、もし受けていれば、彼らの労働は十分生産的になるだろう。職業教育の欠如こそ問題である」と。またもや「その通りだ」と。

「宗教的ファナティズムと同様に、今日の諸関係への利害が判断を狂わしている」と、社会主義者は言う。「機械、生産手段への私的所有権にその全責任がある。したがって、革命的社会民主党に支持を与えたまえ」という何百万人もの人々の声が鳴り響く。

「だれが正しいのか」と、ヒルシュゾンは尋ねる。

われわれは、ここで、人民大衆のプロレタリア化の責任を鋤や紡ぎ車になすりつけることがいかに愚かであるのかを、見る。つまり、実際の状況についてのきわめて一方的かつ表面的観察がこのような結論に導く原因である。今日の全生産様式は、今日の貨幣制度の導入の結果のひとつ、すなわち、今日の貨幣制度によって歪曲された自然法則の結果のひとつにすぎない。「需要と供給が価格を決定する」にしても、今日の生産様式は社会的病気の最後の局面にすぎない。というのも、今日の生産様式は、資本を少数者の手に集中させるとともに、それに対応したプロレタリアートを大量に形成することとを前提としているからである。つまり、今日の生産様式はこの二つの要因なしには、登場しえなかったからである。

人民大衆のプロレタリア化と資本の集中は、収入源としての鑄造権が領主から奪われた時から、つまりいわゆる統一的な貨幣制度が導入された時から一国の管理費が貨幣から商品に転嫁された時から一始まった。私が知っているかぎり、ジョージⅡ世の政府のもとで国王の鑄造権を廃止したイングランドから始まった。したがって、イングランドは、資本主義の生誕地にほかならないのである。

イングランドが体験した大きな危機、すなわち、最新の機械の導入にその責任をなすりつけた大きな危機の主要な原因は、金融危機であった。私は、偉大な知的国民が若干の紡ぎ車によって日常をかき乱されたとは思わなかった。

マルクスは、社会主義者たちに次のように指摘した。「われわれが今日否定的に見ている独特の経済的諸関係の原因は、生産手段の私的所有にある。そしてその結果、理性的な経済秩序は、共産主義的経営機構によってだけ期待される」と。なにゆえ人々はマルクスに反論しないのか。今日まで、人々は、社会主義者たちが誤っているという証拠を待っている。そして共

産主義の計画の実現が提供する実践的困難性に言及しても、社会主義者たちは少しも動揺していない。

それというのも、飢えた者は、いかなる困難も問題にしないからである。今や、マルクスが正しいのか否かが問題になる。彼が間違っているならば、彼に逐一反証を示さなければならない。だが、彼が正しいならば、社会民主党の闘争は、不正なものである。そしてこうした不正なものは遅かれ早かれ復讐されねばならないものである。なぜなら、創造の調和の中にはいかなる不正なものも長続きしないからである。

第二十三章 新しい衣服

われわれは社会的病気の病原体を、錆びていく商品の、錆びることのない交換手段に発見した。カラリア島という純粹培養の場においてわれわれは、そのことを学び、それを絶滅する手段を発見した。

読者は、この手段—錆びていく銀行券—をすでに知っている。したがって、読者は貨幣制度についての知識の点では進歩したと思われるので、私が期待するように、読者は、私が錆びていく交換手段に新しい衣装を纏わせても、驚くことはないだろう。

読者は、貨幣の価値はその原材料とはまったく関係がないということを知っている。また読者は、貨幣は需要の代表者を意味しているということ、そしてその価値は、かくして商品供給に依存しているということを知っている。人々が商品の重量を、商品の外見からではなく、むしろ他のものから読み取ることができるように、貨幣の価値もそれ自身のうちにではなく、他方の側の供給のうちに基礎をもつものである。さらに読者は、紙幣から適切な貨幣を作ることができるばかりでなしに、貨幣の安定した価値を達成するためにはこのような貨幣の均質的な流通に努める必要があるということをも知っている。

したがって、錆びていく交換手段の内容は以下の通りになる。

貨幣

この貨幣の所有者は、国内市場で100アトム（あるいはターラー、シュテルンなど）の価値の商品を提供される。つまり、彼は国内の商品ストックから同じ価値を手に入れる権利をもつ。

彼がどのような商品のどれほどの量を手に入れるかは、供給に依存している。

商品所有者とその代表者、すなわち国民が商品の錆によって被る損失に対応して、帝国金融機関の利益になるこの紙幣は、次のように減価していく。

アトム モレキュレ		アトム モレキュレ	
1月1日	100	—	2月1日 99 69
1月2日	99	99	3月31日 99 10
1月3日	99	98	6月30日 98 15
1月10日	99	90	12月31日 96 35
1月31日	99	70	

小額貨幣の場合

貨幣

この貨幣の所有者は、国内市場で50モレキュレ（あるいは25，5，1）の価値の商品を市場で提供される。つまり、彼は、商人の商品ストックから同じ価値を手に入れる権利をもつ。

彼がどのような商品のどれほどの量を手に入れるかは、供給と需要によって決定される。

この紙幣は様々な色の10枚つづりで発行される。そして商品所有者が錆などによって被る損失に対応して、この紙幣は毎年、帝国金融機関の利益になるようにして回収される。その時には所有者は補償なしにそ

の紙幣を破棄しなければならない。

今や、まず最初にこの貨幣の注目すべき点、または不審の念を抱かれる点は、価値単位としての「アトムとモレキュレ」という名称であるだろう。だが、読者の生活の幸運が、可能なかぎり多くのターラー、ルーブル、ドルを所有することに依存している場合でも、このターラー、シリング、クローネなどの名称をアトムに置き換えても問題ないだろう。なぜなら、貨幣の価値にはまったく変わりがないからである。

さらに、銀行券の所有者には金ないし銀への兌換が約束されておらず、**銀行券の価値の実現に際しては、直接に商品供給に依存している**ことも、注目に値する点である。あたかもその結果、銀行券が絶対にかなる固定的、かつ一定の明確な価値を意味していないかのように読者には思われるかもしれない。だが、読者が、今日の銀行券の所有者は一定量の銀と金を得られるにしても、**この金の交換価値は商品供給に完全に依存している**ことを了解すれば、彼は、**商品供給への直接的依存によって、つまり、銀と金とのリンクの回避によって、全取引の簡素化が達成され、その結果、新しい銀行券の価値が、金属に基礎づけられた銀行券の価値よりも不確実なものでなくなる**という認識に至るだろう。

今や、読者は、新しい銀行券の日々の減価の目的を知っている。また読者がすでに知っているように、このような減価によって貨幣はその所有者にとって直接的な損失なしには流通から撤収させることができなくなるばかりか、このような損失のために貨幣を定期的に流通させることをも強えられる。そして貨幣流通の均質性は、貨幣の価値持続性にとっての基本的条件であるがゆえに、新しい銀行券は、完全に安定的な価値を持つ。つまり、商品価格は**固定的**になるのである。

私はすでに〔前著〕『事態の本質—貨幣改革論続編—』（1981年）の中で、国内の交通や外

国との交通がいかに展開されねばならないのかを示した。同様に金属貨幣を錆びていく銀行券によっていかに代えていくのかを示したばかりでなしに、このような貨幣改革の導入がいかに次のような**直接的かつ不可避免的**な結果をもたらすのかをも立証した。

- 1) 現金払いの導入
- 2) 中間取引の除去
- 3) 利子制度の廃絶
- 4) 失業の不可能性
- 5) 金融恐慌と経済恐慌の廃絶
- 6) 投機や高利貸しの存在基盤の除去
- 7) 金採掘人、取引所、銀行、抵当機関の不必要化
- 8) 租税制度の簡略化
- 9) 貨幣の価値の安定化の達成
- 10) すべての商品の現金化
- 11) あらゆる民間人は、貯蓄を現実的な資本に投下することを強いられ、金のような擬制的資本には投資することを強いられない。
- 12) すべての生産的資本は、いかなる時にも新しい事業を意のままにできる。

そしてこのような要因全体の共働によっていかに遠くない将来に、バラタリア島で支配的になったものにかかなり近い交通状態が必然的に達成されるのかを、われわれは示したのである。

第二十四章 錆びていく銀行券の導入

多くの者は、「これらすべてのことは素晴らしいことだが、すべての諸関係を根本的に変えるこうした改革は、いかにしたら実行できるのか」と、言うだろう。

その目的の実現のためにだれかの権利を侵害する必要があるならば、たとえば、その目的の実現のためにだれかの財布から、たとえ1ペニヒであっても、何かを取り上げなければならないならば、私はそのような改革を私的所有への攻撃、非合法的、非実践的なものと説明する最初の人間になるだろう。だが、幸いにも、铸貨

改革の導入にはいかなるテロも必要としないし、だれの権利をも侵害しない。

錆びていく銀行券を導入するためには、国民経済学者や資本家が、金は、ニシン、石油、チーズのようなひとつの商品であると説明し、すべての国庫機関においていかなる商品も受けとらず、むしろ貨幣だけを受けとるという法律、すなわち金と銀は通常の商品としてあらゆる国庫機関では受け取りを拒否されるという法律が公布される必要がある。

それから、国家は紙幣を製造し、この貨幣を国家的交通制度と説明する。そしてその利用に対しては、国家は運賃を徴収する。つまり貨幣の利用に対しては、国家は毎日貨幣の減価の形態で貢納を徴収する。つまり、国家はこのような貨幣を流通させる。第一に、国家は通常の商品と見なされた金の購買者として登場することによって。第二に、国家は大規模な国家プロジェクトを引き受けることによって。第三に、官

吏への支払いによって。新しい貨幣の強制的流通 Zwangscurs を国家は、新しい貨幣での納税を要求することによって、尽力する。国家が多くの貨幣を発行し、その価値や商品の価値、すなわち1アトムの交換価値が1マルクや1ルーブルの交換価値などに達した場合には、国家は、それ以上の発行をやめ、貨幣の価値を流通に必要な貨幣量の補填によって調整する以上のことをしない。

自分の金や銀を新しい貨幣と引き換えに国家に販売したくない者は、それを保持してもかまわない。だれも彼を強制することができない。だが、彼は、この金を租税、関税、切手、鉄道運賃の支払いに利用することはできない。むしろ彼は、そのために金を販売しなければならないだろう。なぜなら、国家は金や銀を通常の商品と見なし、租税当局ではいかなる商品もはや受けとらないからである。